
ひぐらしバイオハザード

鳴海歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしバイオハザード

【Nコード】

N9984R

【作者名】

鳴海歩

【あらすじ】

昭和五十八年6月…

雛見沢村で、突然の怪奇事件…

皮膚が腐敗した死人の村人が人を食い始める…

雛見沢症候群「Tウイルス」だった場合の話。

よろしく願っています。

第一部 悪夢の始まり プロローグ(前書き)

今回はひぐらしです。

よろしくお願いいたします。

第一部 悪夢の始まり プロローグ

「これが、雛見沢症候群の正体…
ふふっ、皮肉なものね。神になるはずが、その行く末は…死神なん
て…待ってて、おじいちゃん…」

「おっはよー。圭一くん。」

「おうレナ。今日も元気だな。」

清々しい朝… 六月一日に、俺、前原圭一は、登校しようとしてい
た。

「えへへ、そうかな。かな。」

「まったく…これじゃレナに惚れちまうぜ。なあ？」

「え？ふえ？ふえ？」

俺の言葉で、頭から湯気がでるレナ。

まったく、可愛いやつだ。もうちょっとだけ、からかってやるか。

「その時は…な？」

レナの顔へウィンクする。

「け、圭一くん！なにを言うのかな？かな？」

「はは、ごめんごめん。」

本当に可愛いやつだ。

そうこうしているうちに魅音と出会った。

「おはよう圭ちゃん。今日も元気だねー。」

と、言いながら、俺の下腹部に目をやる。

こいつ…

「まあな。おかげさまで、お前のおかげだよ。」

精一杯の皮肉を込めて、いい放つ。

「ははははー！ごめんごめん。」

「つたく…」

本当にこいつは下品だ。男勝りだし。実は、さっきからレナが赤面しているのだが…あえて触れていないのは言うまでもない。

そんなやりとりをしているうちに、学校に着いた。そして、教室のドアに手を伸ばそうとしたその時！
ざわ…ざわ…

某ギャンブル漫画並の悪寒が俺を襲った！

「またか…」

「圭一くん、まさか…」

「ああ、今日仕掛けてくるとは…やるな沙都子。」

だが！

「扉に仕掛けられた画鋏！上には黒板消し！そして、恐らく奥にあるであろう縄（転ばせ用）！」

ならば！反対側のドアから入れば、問題ない！

今回は俺の勝ちだ、沙都子！ハハハハハハ！」

勝った！

だが…

ガン！ ボカツ

「な…に」

状況説明より先に効果音が出てしまった。
まさか…

「おーほっほっほ。無様ですわね、圭一さん。」

「沙都子…畜生。」

ここで何が起こったか、それは…

「恐らく反対側から入るであろう圭一さんを予想して、そこにタライと、タライに繋いだ縄によって発射されたボールを当てたのですわ。おーほっほっほ。」

説明取られた…

「だ、大丈夫、圭一くん？」

「レナ…俺はもうだめだ…がくつ。」

無念…

「圭一、かわいそかわいそなのです。」

梨花ちゃんが頭を撫でてくれる。

「ありがとう梨花ちゃん…」

「先生来たよー」

「やべっ。早く片付けろ。」

こうして“今日”は始まった。
俺はこの時までには、また“明日”が来ると信じていた。
このあと難見沢の時は止まる…

第一部 悪夢の始まり プロローグ（後書き）

お次から本編が始まります。
お楽しみに

第一話 発覚（前書き）

はい、本編始まりました。

拙いですが宜しくお願いします

第一話 発覚

「…が…で、あるからして…つまり…」

眠い。眠い。眠いたら眠い。

それに風邪気味だし。

「先生…具合が悪いです。」

「あら、それじゃあ保健室に行ってください。
移ると大変ですから。」

「あゝい」

「竜宮さん。診てあげてください。」

「はい。」

〈保健室〉

「大丈夫？圭一くん。」

「あゝあ、なんとか…」

「今日はもう早退する？」

「大丈夫。午後に〴〵は治る。心配するな〴〵。」

「うん…」

と言いつつも、レナの顔には心配の色が広がっていた。

（午後）

「よし、治った。ありがとな、レナ。」

「ううん。元気になって良かった。」

「ああ、ありがとう。それじゃあそろそろ教室に……」

ズン！ズズン！

「うおっ！」

「な、なに？」

ズズズズズ……

「地震か！？」

「怖いよ、圭一くん！！！」

「大丈夫だ！俺がいるから！」

「うん。…きやあー！」

「レナ?!！」

見ると、レナにダンスが落ちてきていた。

「危ないレナ！」

俺はレナを抱くようにして、ダンスの下に滑り込んだ。

…どれくらい時間が経っただろうか。

気が付くと、俺とレナはダンスの下敷きになっていた。

「くっっ」

俺は少しだけ体を起こしたが、ダンスが重く、これ以上は無理そうだった。

「ふ…ぬ…」

俺はダンスを持ち上げたが、重くて上がらない。

「ちくしょう…」

「うっん」

と、その時、レナが目を覚ました。

「大丈夫か？レナ。」

「うん。なんとか…」

「そうか、良かった…」

「そうだ。このダンスが重くて上がらなくてさ、あげるの手伝ってくれ。」

「うん、わかった。」

「「ふん。」」

良かった、上がりそうだ。

「ふう…なんとか抜け出せた。」

「圭一くん、早く教室に行ってみよ。」

「ああ。」

〈教室〉

「誰も…居ない。」

「先に避難したのかも。」

「多分…」

その時、扉の向こうに人影が見えた。

「あ、人がいるぞ。」

「え？」

「多分先生だ。俺たちを探しに来てくれたんだ。」

「そうだね。」

「おーい！俺たちはここです！」

すると、人影がこちらを向き、こちらにちかづいてきた。しかし、足取りは重く、ふらふらしていた。

「先生も怪我したのかな？かな？」

「うーん。多分そうかも。」

なので、こちらから行く事にした。

「せんせ！…い？」

“それ”は明らかに先生…いや、“人”ではなかった。皮膚はただれ、白目をむき、肌は遺体のように白かった。

「え？」

そして、“それ”はいきなり俺につかみかかった。

「うおっ！」

「圭くん！」

「こいつ…はな、れるよ！」

俺はなんとか振りほどき、相手を壁へ押しした。
相手は壁に当たったが、またこちらに向かってくる。

「レナ！こつちだ！」

妙に危険を感じた俺は、一度教室へ逃げる事にした。
俺たちは、ダッシュで教室へ駆け込んだ。

「はあ…はあ…」

なんなんだ、あいつは。」

「分かんないよ。」

「やべえな、あいつまた来るぞ。」

「なにか武器になるものは…」

俺たちはそこらへんを見渡したが、何もなし。
次は、ロッカーを物色する事にした。

「ない…ない…ん？」

そこにはバットがあった。

正直、すこし不安だったが、無いよりはましだ。

「レナ、どうだ？」

「鉈があつたよ。」

「え？」

なぜだ？なぜ鉈がある？ここに？

疑念が後を絶たないが、ひとまずそれは置いておこう。今は身を守る事が優先だ！うん！優先するつたら優先だ！と、そこで“それ”が姿を表した。

「来たな…」

「うん…」

二人とも、武器を構える。

「いいか、あいつはかなりタフだ。短期決戦で行くぞ。」

「うん。」

「うおおおおっ！…！」

先手必勝！
行くぜ！

「ウツデイー！」

ん？なんか、前にもこんな事言っただよな…
それはともかく、俺はそいつの前頭部をぶん殴った。

「うおおおお…」

そいつは、変なつめき声をあげて倒れた。

「よし！」

だが、そいつはまた立ち上がった。

「なに！」

「圭一くん！危ない！」

と、レナが鉈で足を切った。容赦ねえな…

「大丈夫？」

「ああ。」

「にしても…」

さすがのレナも、足を切り取る事は出来なかったようだ。
しかし、普通ならば、足を抱えて悶えるところだが…どつやら、こ

いつには「痛み」という概念は無いらしい。
普通に立ってきている。

しかも、微量の出血しかしていない。血が流れていないようだ。

「あり得ない…」

「逃げよう！圭一くん！」

俺たちは、そいつの横をすり抜けて、廊下に出た。

「よし、じゃあ玄関から…え？」

玄関では、そいつ“ら”がいて、入り口を塞ぐようにたむろしていた。

「ヤバイ…」

これはヤバイ。強行突破するか？いや、ヘタしたら袋叩きだ。

「圭一くん！窓から出よう！」

「え？あ、ああ！」

レナの機転のおかげで脱出することができた。

「はあ、はあ…」

「でも…これからどうするの？」

「ひとまず魅音の家に行こう。確か、避難所だった筈だ。」

「……」

…俺はこの時まだ解っていなかった。
この事件が、日本を、いや、世界を揺るがす大事件になるなんて…

第一話 発覚（後書き）

次回から部活メンバー集合です

第二話 再会（前書き）

今回は短めです

第二話 再会

「はあ…着いたな。」

「うん…なんとか。」

俺たちは、魅音の家に着いた。

道中、さっきのやつと同じ奴と遭遇した。しかもそいつらは、人を食っていた。

今思い出しても、吐き気がする。

「おーい！誰かいるか！」

俺は門を開けて、力一杯叫んだ。

だが、誰も答えず、物音一つしなかった。

「誰もいないか…」

「圭一くん！あれ！」

「え？」

レナに言われて家の中に目を向けた。
見ると、またそいつらがいた。

「な…」

「どんだけいんだよ、こいつら…」

「レナ！早く逃げよう！」

「うん！」

「…え？」

なんと、真後ろにもいた。しかも、あと二、三步の距離だ。

「あ…あ…」

まずい。これはまずい。死ぬのか？ここで？

いや、クールになれ、前原圭一！なにか、なにかある筈だ！突破口が！

そうして考えている間にも、そいつは一步、二歩、近付いてくる。

「もう駄目だ…」

俺たちが絶望していた時、唐突に何かの破裂音が響いた。すると、目の前のそいつが倒れた。

「え？え？」

「はろろろくん。圭ちゃん。レナさん。」

「大丈夫ですか。」

「詩音！葛西さん！」

そこには、ライフルを持った葛西さんと、スタンガンとハンドガンを持った詩音がいた。

「助かりました。」

「ありがとうございます。葛西さん、詩いちゃん。」

危なかった…死ぬかと思っただぜ。

「お二人とも、長話をしている暇はありません。こっちへ！」

葛西さんが俺たちを誘導する。

俺たちが向かった先は、園崎家が所有する防空壕だった。どうやら立て籠る準備は出来ているようだ。

俺たちは地下室の中に入った。

「みんな！」

「圭ちゃん！レナ！」

「圭一さん！レナさん！」

「生きてて良かったのです。にぱー。」

「ああ。んにしてもあいつらは何なんだ？人を…人を、食ってたぞ。」

もうあんなの見たくない。

「私たちだって分かりませんよ。」

詩音が答える。

「だけど、あいつらに噛まれたり、引っ掻かれたりされないようにして。あいつらみたいになるよ。」

「そうか。」

見ると、沙都子が不安な表情をしていた。よほど怖い体験をしたのだろう。無理もない。俺でさえ怖いんだ。沙都子をもっと怖いだろう。

「とにかく、皆さん銃をもって下さい。身を守る術を持たないと。」

「こんなの、扱えませんわ。」

沙都子が不安そうに口にする。

「沙都子。…甘ったれないで。」

「な…詩音。そこまで言わなくても…」

「圭ちゃんは黙ってて。」

俺は詩音に一蹴された。

「いい。沙都子。ここに來てから、あなた不満ばかり口にしてるけど、それで生き残れると思ってるの？あなた、悟史くんのこと、待つんでしょ？」

「う…う…」

沙都子が泣きじゃくる。まあ、こんな幼いのに、しっかりしろと言

う方が無理だが、確かに、今は泣き言を言ってられないからな。しかし、銃なんて、綿流しの祭りでしか扱った事ないぞ。しかもあれはオモチャだ。

「けど、これからどうするのさ？」

魅音が問題点を挙げる。確かに、どうしよう。

「ひとまず、3日ほどここに立て籠りましょう。」

「なぜ？」

「このまま居れば救助が来ます。しかし、同じところに居座るのも危険ですので、次は、診療所に行きたいと思います。」

「分かりました。」

さすが葛西さんだ。大人なだけに、ちゃんとした判断をしている。頼もしい事この上ない。

「ただ、3日間の間に、ここがバレたらおしまいです。あと、トイレなどは、常備しているのでご安心下さい。それと、夜になったら、レナさん、魅音さん、私、圭一さん、詩音さんの順で、二時間ずつそのモニターで見張りをします。」

「はい。」

葛西さんと俺は、深夜に見張りをするみたいだ。さすがに、男にこの時間帯を任すことになるな。

「それでは、頑張りましょう。」

「はい。」

第二話 再会（後書き）

次から冒険です

第三話 行動（前書き）

今回で一段落着きます。

第三話 行動

（3日後）

「…3日経ちましたね。」

「はい。」

「それでは、外に出ましょう。行き先は入江診療所。いいですね？」

「はい。」

皆、銃を構える。

沙都子は…沙都子も、闘う事を決意した目をしていた。

「では、行きますよ…1、2の、3！」

葛西さんの合図と共に、皆は外へ飛び出した。

3日ぶりの朝日が、俺たちを照らした。

だが、今はそんな事を感じる余裕はない。

「走って下さい！」

「正門で集合…な！」

「駄目だ…」

正門には、そいつらがいた。ただ居ただけではなかった。何かに引

き寄せられるように群がっているのだ。

「正面突破……」

「は、絶対無理でしょう。」

ダメ元で言ってみたが、当然俺の案は却下された。

「き、気付かれましたわ!」

沙都子が叫んだ。

見ると、一人、二人ずつ、こちらに感付き向かってきた。

「地下室に戻りましょう!」

〈地下室〉

「はあ…はあ…みんないるか?」

「うん」

「あれでは絶対に無理ですね。」

「またここに立て籠るんですの?」

「そうなるしか…」

「みんな…一つ提案があるんだ。」

魅音が言った。

「なんだ?!」

「ここにはもう一つの出口があるでしょう?そこから、園崎家が所有する車が何台もあるんだ。それで…」

「あれを突破する…と?」

魅音が頷いた。なるほど、それならイケるかも知れない。

「行く途中にもいるかも知れないけど…」

「ここに立て籠るよりはマシですわ。行きましょう。」

珍しく沙都子が賛同する。「こう言っちゃなんだが、すごく男らしい。

「よし、それじゃ行くっ!」

「…よく考えたら、鍵、持ってなかったね。」

車が置いてある場所に来て、悟った。

「大丈夫です。私の車があります。」

と言って、葛西さんは車のエンジンをかけた。
よかった。これで脱出出来る。

「では、行きますよ。」

皆が車に乗り込み、車は発進した。

しばらく行くと、さっきの集団が見えた。

葛西さんはサイレンを鳴らしながら集団を強引に突破した。
多少轢くことになったが、仕方がない。

「フツ…」

ん？今、葛西さん笑わなかったか？

「ククククク…」

ま、まさか…

楽しんでいる？！

普段見れない葛西さんの一面を垣間見てしまった。この事は胸に閉
まっておこう…

「ん？」

「どっしたんですか？」

「圭一さん。運転を代わってください。」

「え、ええ?!」

「前に邪魔な物があります。」

俺は強引に運転席に座らされ、前を見ると、ガス欠であろう車が横に並んでいた。

「なにするつもりですか？」

「射ちます!」

「え?! 強行突破すればいいじゃないですか？」

「これは私の愛車なので、余り傷付けたくないんです。」

よく言うぜ。さっき無茶苦茶楽しんでた癖に。しかし、射つと言ってもどうするんだ？

すると、葛西さんはライフルで一つの車の車体を何発か射った。

恐らくタンク部分に当たったのだろう。車は爆発し、他の車をふっとばした。

「マジかよ…」

「このくらい朝飯前ですよ。」

この人の「朝飯前」はどの程度なのだろうか。

この難見沢にはどれだけ変人、じゃなかった、すごい人が居るのだろっ。

「圭一くん！前！」

「どうした？…またかよ。」

勘弁してほしいぜ。

またあいつらの大群だ。

「行きますか？」

「ここはどうしようもないですね。お願いします。」

「分かりました。行きます！皆！しっかり捕まってくれよ！」

グシャツ…グシャツ

あまり聞きたくはない音が響く。
が、しかし…

「楽しい…」

思わず声にだしてしまっほほどに楽しい…

葛西さんが笑った気持ちがわかった。本当に楽しい。他の皆にも味わわせたい。出来ることならこのまま轢き続けたい。ああ、轢き続けたい。

「圭一くん、顔が怖いよ…」

「圭一が酷い事を考えているのです。」

「あ、ああ、すまねえ。」

「あともう少しです！踏ん張ってください！」

「踏ん張るより、楽しみますよ！」

といいながら、診療所が見えた。

しかし、あいつらが極端に少ない。少なくとも、もう少し群がって
もいはずだが… まあ、入りやすくいい。行くぜ！

俺は強引にブレーキとハンドルを切った。

「くっ… いけるか？」

正直、診療所に突っ込むかと思っただが、ドアをふっ飛ばしただけで、
むしろ車が蓋になったような形になった。

「おい！誰か居ないのかー！」

「え?!前原さんですか？」

「監督！」

「よかった。皆さん無事でしたか…」

「はい。」

「監督は、あいつらはなんなのかわかりますか？」

「あいつら?ああ、ゾンビの事ですか？」

「ゾンビ?」

ゾンビって、遺体が動くあれか?

「はい。一人捉えて解剖してみたのですが、体内の構造が人間と類似しており、血液も遺体のように凝固しているなど、動く屍、ゾンビ、というところです。」

「あ、そういえばここにはゾンビの気配がありませんね。」

「え?! あ、ああ、はい。まあ、新築ですから、ドアも、頑丈なんですよ。ハハハハハ。」

あれ? 監督、えらく動揺しているぞ? 何でだろう。まあいいや。

「そういえば、鷹野さんは?」

「え、あ、ああ、鷹野さんですか。鷹野さんは幸運にも、今日は学会に行っていないんです。」

そうか、よかった…

「なににせよ、ここに居れば安心です。」

「そうですね。」

これであとは、救助を待つだけだ。

にしても、どつと疲れたな。まあ、三日間の立て籠りに、今日のやつもあるからな。

「あの、寝かせて貰ってもいいですか？」

「どつぞどつぞ、突き当たりの右の部屋が空いています。」

「ありがとうございます。」

もう今日はぐっすり寝よう……

「た、鷹野さん……なんで……」

「ウフフ、ジロウさん。私はね、お爺ちゃん^{おじいちゃん}の遺志を受け継ぐために、頑張^{がんば}って来たの。だから……ここで、“生まれ変わって頂戴”。」

「や、やめてくれ、鷹野やめろ、やめろー！ー！」

第三話 行動（後書き）

今回圭一が暴走しました。
次回から地下に忍び込みます

第四話 潜入（前書き）

今回から本番です。

伏線ありすぎかな？

第四話 潜入

…気がつけば俺は走っていた。後ろからなにか来ている。図体のでかい何かが。思考はしっかりしていないが、これだけはわかる。あれに追い付かれたらヤバい。何がどうヤバいかはわからないが、とにかくヤバい。

ここは、どこかの建物の中だ。だが、窓が見当たらない。

ただ無意識に走っていた。すると、行き止まりにぶつかった。マズ

イ…

すると、後ろからそれが来た。

ゆっくりと、俺が怖がるさまを楽しむように、一歩、一歩ずつ…

そしてそれは俺の目の前に…

「うわあああああああ！！」

「ああっ！」

気づけば、俺はベッドの上にいる。
全身は汗だくで、汗でシーツはぐっしょりと濡れていた。

「夢か…」

まったく、嫌な夢だ…出来ることならもう見たくない。

「ん？」

悪夢で気が付かなかったが、ここは、昨日俺がねた診療所の病室ではない。

「ここは…」

ジメジメしたカビ臭い空気に、薄暗く窓がない。まさに地下室といった感じだ。

「なんでだ？」

とりあえず、パンツとシャツでいるのはなんなので、足下に畳んであったYシャツとズボンを着た。

「うーん。」

念のため、武器を持っていくことにした。

幸い、枕元に銃も置いておいたので、それを持っていくことにした。

「弾はこの弾層ぶんだけか…大事に使おう。」

俺は出来るだけ音を立てずに扉を開けた。

「誰もいないか…」

俺は一番奥の部屋に居たらしく、廊下は一本道だった。

途中途中、違う部屋を見てみたが、俺の部屋と同じ作りだった。違う点は、ベッドがないのと、人がいないことだった。

すると、今までの部屋と違う部屋を見つけた。俺はその部屋に入り、部屋の中央にあるテレビ画面をみた。

そこには、今までの俺が見た部屋が映っていた。もちろん、俺の部屋も…

そのすぐ横に机があり、その上にはノートがあった。　どうやら日記のようだ。

「監視員の日記」

「4月3日

今日、この区域の監視員に選ばれた。この仕事は楽な上に高収入だから、これ以上ないほどの仕事だ。それに、実験台も廃人同様だ。これほど楽な監視はないな。」

「実験台…?」

「5月1日

今日は待ちに待った給料日だ。さすが高収入の仕事だ。そろそろ、外に出てみたいぜ。

4月25日

なんなんだ、あの小此木とかいう男。有休とれると行ったのに、給料貰ったあとは無効だと?じゃあ今度の有休を予約したら、次は先

に有休取られて無理だと？予備がないとっていたが、ふざけやがって。」

「小此木…小此木造園の園長だが…なぜ？ここは小此木造園なのか？」

「5月13日

やべえ、205号室のやつが逃げやがった。俺が昼寝をしているうちに…これはやばい。明日、逃げよう。
ばれたら…畜生、想像するだけでも震えが止まらねえ…」

「これで…おわりか。」

しかし、この日記の筆者は…いや、考えないようにしよう。にして
も…

「実験台…？一体何の事なんだ。そして、ここは小此木造園か？」

なんなんだ…こう次から次へと…

その時、ドアの向こうで物音がした。

「誰だ…？」

もしかしたら、レナたちが探しに来てくれたのかも知れない。

「いや、ゾンビということもあり得る。慎重に行こう。」

ドアの窓越し見たが、案の定、ゾンビだ。しかも、扉の前にいる。
ならば…

俺はドアを思い切り蹴り、勢いよくドアを開けた。ゾンビはドアに

当たり、吹っ飛んだ。

幸い、痩せていたゾンビだったので、うまくいった。

俺はその内に部屋をでた。すぐ近くに階段があったので、それを登った。ここは地下だ。地上に出ればどうにかなる。

と、その時、すぐ近くを人影が通った。

ゾンビかもしれないと思った俺は、とっさに近くの部屋に逃げ込んだ。

人影は一瞬こちらに勘づいたが、すぐにもどって行った。

「あぶねー…」

「まったく、次から次へと…ん？」

机の上には、またノートがあった。

俺はそれを手に取った。その内容は…

「マジかよ…」

「どういふ事ですか！圭一くんがいないなんて！」

私たちは、圭一くんが朝起きるといかなかった、と言う報告を監督に

聞いた。

「お、落ち着いてください!」

「これが落ち着かずにはいられますか!」

魅いちゃんの言う通りだ。落ち着いてなんかいられない。

「…わかりました。」

「え?」

「心当たりが有ります。」

「本当ですか?」

「ええ、しかし、ゾンビがいたり、かなり危険ですが…」

「構いません!」

圭一くん!今、助けに行くよ!

「鷹野さん…ここまでやるとは、私も我慢できません。前原さんを、悟史くんの二の舞にはとせません…」

第四話 潜入（後書き）

伏線が消化できるか不安です。

次回、バイオシリーズで有名なあのセリフがでる！

第五話 実態（前書き）

今回はあまり行動させません。それと、あの名言が！

第五話 実態

「マジかよ……」

俺はその日記の内容を信じる事が出来なかった。なんてこった……これが本当ならここは……まさか……その内容は……

「監視員の日記2」

「5月4日

今日、山田と中村と俺でポーカーをした。中村の奴、やたらついていたが、きつとイカサマに違いねえ。

5月13日

今日、朝起きたら山田に強引に宇宙服みたいなものを着せられた。なんでも新田が受け持つ区域の実験台が逃げ出したらしい。おかげで研究所は大騒ぎだ。研究員の奴らめ、毎日実験ばかりやっているからこんな事になるんだ。

5月15日

今日、首に腫れ物ができた。医者に見せたら、でっけえ絆創膏を貼られた。それで、俺にもう宇宙服を着なくてもいいと言った。

5月16日

今日、鏡を見たら、首にウジ虫たかってやがる。それに痒い。医者も相手にしてくれない。

5月17日

今日 宇宙服 きた 山田 きた。
青ざめた 顔してたから 食べた。
うまかった です。

かゆ かゆ ウジ虫 増えた いったい おれ どう
なって

かゆ かゆ かゆ うま かゆうま

かゆ
うま
「

俺は…正直、信じられない。いや、信じたくない。

「だとしたら、ここは…」

いや、まだ決まったわけじゃない。もう少し、探索してみよう。

どれくらい歩いたかわからない。そんなとき、あるものが目についた。

“ T - ウイルス保管所 ”

「 T - ウイルス ? 」

俺はドアを開け、その部屋には無数のカプセルが冷却装置のようなものに入っていた。

「 なんだ ? これは 。 」

部屋をまわっていると、紙の束が目についた。どうやら研究資料のようだ。

「 B ・ O ・ W ・ 実験資料 」

ゾンビ

正式名称は活性死者。人間が T - ウイルスに感染してできるもの。これといって優れた点はないが、数が多いため、色々な使用法が期待される。

ケルベロス

訓練が施されたドーベル犬の B ・ O ・ W 。俊敏な動きと、野生の本能からか集団で行動する。低コストで大量に産み出せるので初めて成功した B ・ O ・ W である。

クロウ

T - ウイルスに感染した人間の死体を食べて二次感染したカラス。元々 B ・ O ・ W ではないが、空中での機動力、集団行動などの要素をみる限り、 B ・ O ・ W としての生産も可能であり、期待できる。

ウェブスピナー

蜘蛛にT・ウィルスを投与しできたB・O・W。非常に巨大化しており、毒をもつ。雌のウェブスピナーの腹には大量の卵があり、死ぬと大量の子蜘蛛がでるが、戦闘能力は期待できない。

ハンター

緑色の体を持ち、簡単な命令をこなしながら、高い殺傷能力を兼ね備え、集団で行動する。非常に完成度の高いB・O・Wであり、特に相手を一撃で葬る“首狩り”は、かなり強力である。今後、水陸両用のタイプと、強化タイプを生産する予定である。

タイラント

成人男性をベースに、様々な肉体改造を施してできる最強のB・O・W。強靭な肉体が武器であり、学習能力を兼ね備え、武器を使う、細かい命令を理解するなど可能である。そして、体に一定以上のダメージが入ると肉体能力が数倍にはねあがる“スーパータイラント”となるが、この時は本能の赴くまま行動するため、あまり好ましくない。」

「B・O・W?」

なんだそれは。だが…

「ゾンビがT・ウィルスに感染したもの?つまり…」

人工物？

なんてこった…つまり、雛見沢がこうなった原因は、T・ウィルスというもので、それはここのもの？

「そもそもT・ウィルスってなんなんだ…」

俺は近くにあった机をあさり始めた。すると、もう一つの研究資料があった。

「T・ウィルスについて」

「T・ウィルスとは、雛見沢に生息する寄生虫のDNAを元に改良したウィルスである。このウィルスは、高い感染力をもつ。これに感染した人間は、皮膚が腐敗し、ゾンビとなる。ゾンビとなる過程は、まず、細胞が活性化するが、激しい新陳代謝により、抗ウィルス剤を定期的に投与しなければ、細胞の過剰活性化に肉体がついていかず、死んだも同然となる。が、細胞は活着しているため、肉体を動かす。これがゾンビである。ゾンビになった場合、脳は破壊され、自我を保たず、食欲を満たすため、人間を食べる。ゾンビに引っかけられる、噛まれるなどをされた人間は、ゾンビになる。B・O・Wに同様の事をされても同じことである。また、ゾンビに一定以上のダメージが入ると、体力、攻撃力、俊敏性など、全ての能力値が上がった“クリムゾンヘッド”となる。遺伝子の構造により、十人に一人の割合でT・ウィルスに完全な抗体をもつものがある。これが多い区域では実地テストを行う事ができる。また、さらに千万人に一人の割合でT・ウィルスを完全に取り込み、自我を保ったまま肉体能力を飛躍できるものもいる。現在、ここ雛見沢にそれが一人居ることがわかっている。ただいま、新しいウィルスを開発中である。ちなみに、T・ウィルスのTは雛見沢の寄生虫の発見者のイニシャルからきている。」

「これが…全ての元凶、T・ウイルス…」

気が付けば、俺の手にはじんわりと手汗が滲んでいた。怒り、哀しみ、憎しみ、絶望、恐怖…全てが混じった、そんな手汗だった。

…俺は、知ってはいけない事実を知ってしまった。だが、知らなければならぬ事でもあった。狂ったこの世界では…狂った、知ってはいけない事実しか得られないだろう…

もう…逃げない！

第五話 実態（後書き）

あの名言とは、「かゆ うま」でした！

第六話 眞実（前書き）

今回、「眞実」と銘打っておりますが、伏線はあります。

第六話 真実

俺はT・ウィルスの資料を持って探索を続けた。すると、「タイラント研究室」というのを見つけた。

「タイラント…?」

その時俺は、研究資料にあった、タイラントを思い出した。

「まさか…」

俺の“本能”は、入ってはならないと告げた。が、入りたい、入らなければならぬ、という“思い”があった。ついさつき、逃げないと誓った俺だ。どんな扉も開ける覚悟は出来ている。

俺はドアを開け、周囲を見渡した。すると、奥に人影が見えた。

「…誰だ。」

俺は銃を構えながらゆっくりと近付いていく。

「久しぶりに会ったのに、挨拶も無しに、誰だ、なんて…酷いと思わないのかしら?」

それは…鷹野さんだった。鷹野さんは、気持ちが悪い程に笑っていた。銃を俺に向けながら。

「まさか…学会に行っていたんじゃないか…」

「学会…？」

鷹野さんはいつものように妖艶に笑った。俺はその笑いがとても恐ろしく思えた。

「入江の坊やはそんな嘘を使ったのね…まあ、60点、というところかしら。」

「入江の坊や…？まさか…」

「そう。“入江先生”も、仲間。」

「なん…だつ…て。」

俺は思わず銃を降ろしてしまった。鷹野さんは、その瞬間を狙った。激しい破裂音が聞こえたかと思うと、俺の右腕の二の腕には痛烈な痛みと、血が抜ける感覚があった。俺が撃たれたと解つたのは、その直後だった。

「ぐああああっ！！！！」

「大丈夫。かすっただけ。大事な“実験台”を、殺すわけがないでしょ。」

「俺を…ゾンビにするのか？」

俺は口に出すのも恐ろしい言葉を紡いだ。

「残念だけど、もうゾンビに関するデータは取れたわ。期待に添え

「ならなくてごめんなさいね。」

「ここを…雛見沢を、実地テストの場にしたのか？」

「いいえ。」

「嘘を吐くな!!」

俺は精一杯の怒りを込めて叫んだ。

「雛見沢にはT・ウィルスの抗体を持つ人間が多かったんだろう？
実質、かなりの数が生き残っていた!」

「…違うわよ。今回のT・ウィルスは…事故で流出したの。」

その言葉を言う前の鷹野さんは、悪魔のような笑みを浮かべたように思えた。

「これからあなたには、タイラント・プロトタイプと戦って貰うわ。」

「タイラント・プロトタイプ？」

「の前に…ここでクイズよ。」

「クイズ…だと？」

「そう。簡単なクイズよ。このタイラントは、誰を元に開発したでしょう?」

「な…」

何を言っているんだ。この女は。

「ヒントは…そうね。元の方は、とてもカメラが得意なの。」

「カメラ…まさか!」

「そう、そのまさかよ。これの元の方は…ジロウさん。」

「じろ…っ!」

俺は怒りのあまり、叫ぶこともできなかった。

「やあね。ジロウさんはもっと遅く生まれ変わったのよ。」

「ぶざっ…けるなあああ!!!!」

俺は即座に立ち上がり、銃を向けた。腕の痛みは感じなかった。しかし、撃つことは出来なかった。

「あらまあ…立ち上がれるなんて…でも、なぜ撃たないの?それとも…撃ちたくないの?」

「っ…!」

俺は…出来るなら人なんて撃ちたくない。いや、すでにこの女(鷹野)はもう人ではない。人の皮を被った悪魔だ。

だけど、人の形をしたものを撃つなんて経験はしたことがない。そんな事、しない方が幸せだ。

でも、今は撃たなければ…撃たないと。撃つんだ。撃て。撃て。うて。うて。ウテ。ウテ。ウテウテウテウテウテ…

「あああああっ！！」

その時、俺の頭には激痛が走った。何かが暴れているような…

「あら。“副作用”が出てしまったかしら。」

「副作用…？」

「まあいいわ。とにかく、私はタイラントのデータを取りたいの。」

鷹野は、カプセルの中のライトをつけた。富竹さんは…もう、富竹さんではなかった。肌は白く顔はゾンビのように醜かった。そして、左胸にある、大きい心臓に、右手の大きい爪は、いわゆる怪物のようだった。

「富竹…さん。」

俺は、恐怖と、富竹さんがこうなってしまった事の悲しみがこもった口調で富竹さんと呼んだ。当然、富竹さんは何も反応がない。それが、とても悲しく、そして憎く思えた。

「これが…おじいちゃんの研究なのよ。前原くん？」

「おじいちゃん？」

鷹野さんは、何も答えずカプセルの中の人口羊水を抜いた。富竹さん…タイラントは、カプセルのガラスに激しく体当たりし、カプセ

ルから出た。

「さあ、戦うのよ。タイラント！」

冗談じゃねえ。こんなのに勝てるか…もうダメだ…

「え？ちよつと。待ちなさい！」

しかし、なんと タイラントは鷹野の方に歩み寄った。

「まさか…まだ、早かったと言っの？そんな…おじいちゃん…」

その時の鷹野は、とても怯えていた。

だが、タイラントはそんな事はお構い無しに、鷹野に近づくと…

「ああああああっ！！！」

鷹野を右手の大きい爪で串刺しにした。

「あ、ああ…」

俺は、動けなかった。恐怖のあまり…

「クールになれ…前原圭一…大丈夫、落ち着け。動け…おれ…」

だがタイラントは俺の目の前に来たたん、その場に倒れた。

「え？」

おれは一瞬、なんなのか解らなかった。

その時、鷹野が言ったのを思い出した。

『早すぎたと言っの?』

「早すぎた?…未完成だったって事か。」

と、その時サイレンと共に、アナウンスがひびいた。

「自爆装置が発動しました。研究員は迅速にプラットホームへ移動してください。」

「自爆装置?!」

「前原さん!聞こえますか?」

監督?今さら信じられるか。あんたの事なんか…

「圭一くん!大丈夫?!」

「レナ!」

「圭一くん!監督は全部話してくれた!T-Wイルスのことも!」

「なに?」

「細かい話はあと!早く地下に来て!圭ちゃん!」

「監督…!」

「とりあえず…地下に!」

俺は地下へとかけ降りた。地下に着くと、みんなが電車に乗って俺を待っていた。

「圭一さん！早く！」

「ああ！」

俺は電車に駆け込む。が。

後ろから天井を破り、俺に向かってタイラントが走ってきた。

「な…！」

俺はギリギリかわしたが、バランスがとれず、転んでしまった。

「前原さん！」

俺は思い切りタイラントを蹴った。すると、タイラントはものすごい勢いで壁にとんだ。

「へ？」

タイラントは壁にめり込み、暫く動かなかったが、ゆっくりと動き出した。

「なんだと…？」

「前原さん！今のあなたは、元の運動神経の十倍です！」

「え？あ、はい！」

「やはり…前原さんが…」

監督は何かを呟いたが、俺には聞こえなかった。
今、俺はこいつを片付けなくちゃ！

「さあ、来い！」

第六話 真実（後書き）

次回は戦闘シーンが多くなります。ああ、大変だ。

第七話 脱出（前書き）

これで第一部はおわりです。

第七話 脱出

俺は手元にある銃でタイラントの心臓を撃つ。一、二発打ち込んだが、やはり倒れはしない。

「やっぱり、こんな銃じゃ…」

「前原さん！これを！」

すると、葛西さんが自分のライフルを俺にくれた。

「弾がなくなったら言ってください！」

「はい！」

ライフルを構えた。タイラントが俺の方に走ってくる。

俺は狙いを外さないように、タイラントが来るギリギリまでライフルを構える。

「来いよ…」

俺は1メートル先のタイラントの心臓を撃つ。
見事命中し、タイラントは倒れた。

「やった…」

俺は勝った…！

「前原さん！まだです！」

「え？」

その時、後ろからなにかが現れた。

「な！」

それはタイラントだった。しかし、様子がおかしい。心臓が激しく鼓動している。

タイラントは、いきなり俺を串刺しにしようとした。

「ぐっ！」

驚いた事に、スピードが速くなっていた。爪は俺の脇腹にかすれた。

「つつ…！」

俺が痛みにあたじろいでいると、タイラントは俺の腹をストレートで殴った。俺は大きく吹き飛ばされ、壁に激突した。

「がっ…ゲホッ！」

俺は吐血し、口を切った。

その時、サイレンと共に、アナウンスが響いた。

「残り五分です。」

「前原さん！早く！」

監督が俺を呼ぶ。続いてみんなも俺を呼ぶ。

「圭一くん!」「圭ちゃん!」「圭一さん!」「圭一!」

みんなが呼ぶ…俺を…でも…もう…疲れた…

もう、みんなの声が聞こえない。耳鳴りがする。みんなの声を聞くのを妨げるように。

そうするうちにも、タイラントは一步、二歩、俺に近付く。

「お願い圭一くん!立って!頑張って!」

レナ?ああ、「がんばれ」…か。ここに来る前にも、何回も聞いた。だから、俺は…幼い子をモデルガンで…そして、ここに来た。皆優しかった。今も…

ここに来て、皆は、あいつらとは違っつて解った。そう、違っ…

「圭一くん!頑張って!」

その時、もう一度、レナの声が響いた。俺は我にかえった。

そうだ…みんな、あいつらと違う。だから、「がんばれ」の言葉の“思い”も、“重み”も違う!だから…

「俺は!立っ!」

「圭一くん!」

もう、逃げないと決めた。それを思い出せてくれたみんなのために
も…勝っ!

「来い！」

まだ脇腹や腹は痛む。だが、無視だ！

タイラントは再び爪で襲いかかるが、俺はタイミングよく避け、至近距離でライフルを心臓に向け撃つ。

タイラントは仰け反り、また爪を下段にふる。

「お前は爪を振ることしかできないのか？」

俺はひねりを入れながらタイラントを飛び越え、背中にまた撃つ。タイラントは仰け反り、反撃をするような様子はない。

「だが、一向に倒れる気配がないな……」

「圭一くん！これを使って！」

レナと魅音が重そうに鉄の塊を投げた。

「前原さん！それはロケットランチャーです！」

「ロケットランチャー？」

「ミサイルがです！それで止めを！」

「はい！」

俺は足元に落ちたロケットランチャーを拾い、構えた。が、タイラントは突っ込んできて、また爪をふった。

「ちっ！……さすがにそう簡単に撃たせてはくれないか……」

俺はライフルを葛西さんに投げ、叫んだ。

「あいつの気を引いてください！」

葛西さんはライフルを掴み、タイラントに弾を撃ち込んだ。
タイラントは、案の定葛西さんの所へ走る。

「そこだ！」

俺はロケットをタイラントに撃ち込む。タイラントは粉々になった。

「前原さん！早く！」

俺は電車に乗り込み、監督が電車を発車させた。
数分後、プラットフォームでは揺れと、爆発が起こった。

「終わったな……」

俺は監督の手当てを受け、疲れきった口調で言った。

「うん……」

レナは悲しそうに言った。

「婆っちゃんも、知恵先生も…みんな。」

「ああ…」

全部…無くした。全部…壊された。

「圭一くん。でも、そこにある紙の束は？」

「ああ、これが…これは、T・ウィルスの資料だ。」

「じゃあ、それで…」

「どうするんですか？」

「え？」

監督が呆れたように言った。

「そんなもの、見せた所で冗談だと思われるだけです。だから…いや、なんでもありません。」

「くそ！」

俺は自分の膝を叩いた。

「圭一くん…」

「でも、これからどうしますの？もう、住む所もありませんわ。」

沙都子が不安そうに言う。

「俺の親父たちは今、東京にいる。どうにかしてくれさ。」

「うん。」

今は、ただ疲れた…

「M S ・鷹野が死んだ。」

「なに?! どういう事だ! ウェスカー!」

「落ち着きなさんね。M r ・ウラジミール。」

「M r ・小此木…!」

「M r ・小此木の言うとおりだ。それに、T - ウィルスのデータも取れたのだ。結果的に良しだ。」

「アルバード・ウェスカー!」

「…今回の会議はここまでだ。各自、新しいウィルス開発に励むよ

うに。」

「ウェスカー…！くっ…」

「これで私は自由…待ってて、お爺ちゃん。今度こそ…」

第七話 脱出（後書き）

すみません。やっぱ次があります

エピソード（前書き）

今回で第一部は終わりです。

エピソード

：あれから俺達は、親父と、園崎分家たちのおかげで、興宮に住んでいる。

部活メンバーは皆、興宮中学、小学校に通っている。突然の大勢の転校生に、皆最初はアイドルが来たように騒いだが、1ヶ月経った今は落ち着いている。

監督は、興宮の病院の外科医として働いている。葛西さんは、無論園崎家だ。

雛見沢のあれは、オヤシロ様の祟りと言われ、都市伝説となった。

俺は、あの事件の事はもう忘れたいと思っている。だからこれからは、青春を謳歌しようと思う。ハハハ。

それじゃあそろそろ学校に行く時間だ。じゃな。

エピソード（後書き）

次から第二部です。頑張ります！

第二部 傘の裏 プロローグ（前書き）

第二部始まりました！

第二部 傘の裏 プロローグ

…街が赤く染まっている。赤いのは、血のせい、火事のせい、はたまた…

俺は銃を持っている。銃口からは煙が出ていた。そして足元には、ゾンビが…

なぜ？…わからない。わかるのは、これは…地獄だという事。遠い火の向こうから巨体が歩いてくる。俺の顔は、何も感じていなかった。いや、少し、感情があるかもしれない。腹の中に、どっしりと落ちるような感覚…それがなんなのか、俺は形容できない。

きがつくと、巨体は、俺の目の前にいた。俺は反応しない。巨体は、俺に向かって腕を振り上げた。

人には、なぜ明日が来るのでしょうか？

それは、新しい一歩を踏み出せるように。

人は、なぜ生きるのでしょうか？

それは、新しい一歩を踏み出すために。

人は、なぜ生まれたのでしょうか？

それは、世界が新しい一歩を踏み出す為に。

ならば、明日への一歩を踏み出す事が出来ない“者”は？

それは…それは、悲しい、悲しい、“物”です…

第二部 傘の裏 プロローグ（後書き）

次からバイオ再発！

第一話 再発（前書き）

少し更新が遅めました。すみません。

第一話 再発

朝。俺は夢をみた。新しい生活が始まってから何回も見た夢だ。

「またか…」

まだ吹っ切れてないのか、俺は…

「今日は…日曜日か。二度寝する気分じゃないな。」

俺たちは、3LDKのマンションに住んでいる。男の俺は一人で寝ている。この部屋は窓がないので、壁に掛けている時計で時間を確認する。

「今は…七時半か。休みの日にみんなが起きるのは八時半だし、ちよつくら散歩でもするか。」

俺はジャージに着替え、スニーカーを履いて外に出た。

外に出ると、なにか妙に暑い。

見ると、すぐそばの商店街が燃えていた。しかも、隣の家にも火の手が移り、他の建物も燃えていた。

「火事だ！」

俺は急いで家に駆け込み、レナたちを起こした。

「みんな起きろ！火事だ！」

「え！？」

まず魅音が目を覚ました。続いて、レナ、詩音、梨花ちゃん、沙都子も起きた。

「早く出る！」

みんなはいつも私服で寝るので、そのまま外に出ても問題ない。

「ひとまず、避難所の興宮中学に行こう！」

「うん！」

俺は焦ったあまり、これだけの火事だと言っのに街が異様に静かだった事に気付かなかった。

「あーあ…」

「燃えちゃってるね。」

「見事に…」

「じゃあ、消防署に行こうぜ。あそこなら大丈夫だからな。」

俺たちが後ろを向くと、人がこちらに向かってきた。おそらく俺たちと同じ、逃げ遅れた人だろう。

「あ、もうここも燃えているんです。だから…」

俺が状況を説明している途中に“それ”が“何か”わかった。わかっってしまった。もう思い出さなくてもない、あの悪夢が…

「みんな、早く逃げろ！」

「え？なんでま…」

「いいから！死にたいのか！」

「…うん。」

「行くぞ！」

レナが察してくれたおかげで、他のみんなも察したらしく、沙都子の顔は青ざめていた。

だが、死にたくないというから、ただ足は動かした。

「はあ…はあ…」

「また…」

ここは消防署の前だ。俺が皆を誘導した。

「もう…こりこりですわっ…」

沙都子が言った。沙都子の声は震えていた。だが、皆に悟られないように、必死に震えを止めようとしていた事がわかった。

「ひとまず、消防署に入りましょう。この街にも、抗体を持つ人間がいるはずですから。」

詩音が提案した。

皆もそのつもりだったらしい。

俺たちは消防署の中に入った。

「ここにもゾンビがいるかも知れない。慎重に行くよ。」

魅音が先導してすすむ。

「うあああっ！離れろ！こいつ！」

受付の方から声が聞こえてきた。

「俺が行く！待ってる！」

俺はそこに駆けつけた。すると、中年の小太りの男、早い話メタボ

のおっさんが襲われていた。

「くっ…こいつ…」

俺は武器を探したが、ない。すると、奥に扉があり、そこに入ると、鉄パイプがあった。

俺はそれでゾンビの後頭部を殴った。ゾンビはすぐに倒れた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、ありがとう。助かったよ。」

幸いかすり傷もなく、問題無さそうだ。

「しかし、こいつらは？」

「ゾンビです。」

「ゾンビ？」

「はい。雛見沢が閉鎖されたのはご存じですか？俺たちは、そのこの出身です。」

「え？じゃあ、オヤシロさまの祟りは…」

「…俺たちが雛見沢で目にしたのは、今と同じです。」

「なに！」

「…これ以上はわかりません。ただ、ゾンビに噛まれたりひっ搔か

れたりはしないでください。こうなります。」

俺はT・ウィルスやB・O・Wの事は言わなかった。これは、知らなくていいことだ。

「ああ…しかし、他に逃げる場所は…」

「まさか、ここも人がいない?!」

「まだわからないけど、多分…」

「どこを調べました？」

「三階、二階、一階、行けるところは行った。だが、いない。」

「わかりました。俺たちは、何か通信器具がないか探して来ます。」

「わかった。私は、ここに来た人をひとまず匿う。三階の警備室にいるからな。」

「はい。」

また、始まる。地獄。そして、陰謀。

「完成だ…G・ウィルス…これで、私は…真の天才科学者になる！」

第一話 再発（後書き）

消防署ですね。ちなみに、第二部の「傘の裏」は、アンブレラの裏
という事です。

第二話 地下（前書き）

今回は、物語がゆったり進みます。

なお、後書きに嬉しいお知らせがあるので、よかったら見てやって下さい。

第二話 地下

俺たちは救援を呼ぶ為、通信器具を探し始めた。しかし、これと言つて収穫はなく、皆半ば諦めている状態だ。無論、俺もそうだ。

「畜生…」

行けるところは全て行った。だが、何も無いんじゃないよお手上げだ。

「そうだね。もうどうにもならないよ。」

「ああ…ん？」

待てよ…いくらなんでも、消防署が三階までしかないなんてあり得ないだろ。でも…行けるところは全て行ったし…

「まさか！地下か！？」

そうだ！そういえば受付の裏口にはもうひとつドアがあった！だが、鍵が掛かっていた…

「圭一くん。多分、レナが考えているのと同じ事を考えていると思う。受付の裏口…でしょ？」

そうレナ言った時、皆が示し合わせたように気づいた。

「」「」「あ…！」「」

「ああ、だが、肝心の鍵がない…」

「おーほほほ。なにを言ってますの。鍵なんてこじ開ければよろしくてよ。」

沙都子が勝ち誇ったように言う。

「え？沙都子、ピッキングできるの？」

「びっきんぐ？」

「ああ、ごめん。ピッキングってのは、針金で鍵を開けること。できるの？」

「ええ。」

「それはボクも初耳なのです。」

「見ていなさいませ。簡単に開けて見せますわ！」

おお、沙都子を見直したぜ、俺。トラップマスターの名は伊達じゃないな。

カチャカチャ…
鍵穴に針金があたって音がなる。しかし、残念ながら、もう皆は疲れきっていた。

「何分経った？」

「十分ほど…」

前言撤回。沙都子はやっぱり沙都子だ。

「あと…もう少し…見ていなさいですわ。」

「はあ…」

詩音も溜め息をついた。期待が大きかっただけに呆れも大きい。皆はもう諦め、俺は沙都子にやめないかと提案した。さすがの沙都子も、もう諦めたようだ。

「…やっぱり鍵が必要ですよ。」

沙都子がつなだれながら言った。

「うーん。鍵ね…」

「あ、あのさ、皆…」

レナが申し訳なさそうに言った。後から思えば、どうして先に気付

かなかったのか悔しい程に簡単だった。

「鍵を管理する所って…確か…」

「」「あ…」「」

「ありがとうございます。」

「いやなに、ここから出るためだ。鍵くらいいいよ。」

俺たちは三階の警備室で、鍵束を買った。あの十分はなんだったんだ…

「これか？」

俺は五個目の鍵を試した。すると、鍵はガチャリと鳴り、ドアが開いた。

「…」

皆複雑な心境のようだ。おそらく、開いたことに関しては嬉しいが、じゃああの十分はなんだったんだ、という感じだろう。

「…暗いね。電気をつけよう。」

近くにあったスイッチを押し、電気を点けた。すぐそばには階段があった。下りだけだ。

「この下に部屋があればいいんだけど…」

俺たちが階段を降りると、そこには二つの鍵穴があるドアがあった。

「ビンゴ…だな。」

俺たちは鍵を開け、部屋に入った。

そこは、一つの倉庫だった。保管されていたのはなんと、銃だった。

「…は？」

「なんで消防署に銃があるんでしょう？」

「うん…」

「皆、あれを見てほしいのです。」

梨花ちゃんが一つのダンスを指差す。

「ん？」

そのダンスは置いてある銃が少ないだけで、他に何が…

「あのダンスだけキャスターがついているのです。」

「「「あ…!」「」」

まさか…!

…皆も同じことを考えているようだ。

「動かしてみよう。」

「ああ…」

俺はダンスを移動させた。案の定、その裏にはドアがあった。このドアも鍵穴が二つついている。

「…開けるぞ。」

鍵を開け、俺たちは中に入った。中にはさらに下へと続く梯子があった。

「行くか？」

「いや、何かがあるかわからないから、まず警備室に戻るつよ。」

「ああ、そうだな。」

俺たちはそこら辺の銃を拝借し、警備室へと向かった。

〈三階 警備室〉

「うあああああつ！！！」

警備室の中から悲鳴が聞こえた。まさか…！

「大丈夫ですか?!」

俺たちはドアを開け、部屋を見た。警備室のモニター近くで、その人はゾンビに喰われていた。

「う…」

…もう死んでいる。白目をむき、首から血を出している。

「くっそ…」

俺は銃でゾンビの頭を撃ち抜いた。ゾンビは倒れた。

「もう…どこも安全じゃありませんね。早く脱出しないと…」

「ああ…」

…俺たちは、人の死に慣れすぎた。もう、涙を流す事もない。いや、出来ない…

「くそ！」

俺は床を叩いた。

「なんで…なんでなんだ！なんで…こつならなくちゃいけないんだ
！」

「圭一くん…」

「…早く、行きましよう。」

「…くそ…」

「Mr・バーキン博士がG・ウィルスなるものを開発しているらしい……」

「ほう……その情報はどこで聞きましたね。アルバード・ウエスカー。」

「それは教えられん。」

「まあ、この俺にだけ知らせるといふことは、なにかまずいんですかね？」

「さすがはMr・小此木。」

「別に会議ではないから、そんな呼び方はよしてもらいましょう。」

「フツ…いずれにせよ、山狗を使って“後始末”を頼みたい。」

「わかった…“後始末”の方法は？」

「いつも通りに…」

第二話 地下（後書き）

お知らせですが…

なんと！PV100000突破！

ユニークは10000！

いや〜ありがとうございます。これからもこの調子で頑張っていきます！

第三話 危険（前書き）

今回でわかる人はわかるようになります。

第三話 危険

俺たちは地下に入り、一本道の通路をすすんだ。すると、三本の分かれ道があった。

「…どうする？」

「無難に二人ずつですかね。」

「そうだな。」

という事で、俺、レナで一組、沙都子、詩音で一組、魅音、梨花ちやんで一組となった。

「じゃあな。一通り終わったらここに戻るぞ。」

「オツケー。」

俺とレナが進むと、扉があった。

その扉は、特に鍵はなく、横にカードを入れるような穴があるだけだった。

「なんじゃこりゃ？」

「多分、カードキーじゃないかな、かな。」

「なるほど…。」

だがどうする？俺たち持ってないぞ。カードキー。

「開いたりしねえかな…」

俺は諦めながらドアノブを回した。すると、するりとドアが開いた。

「え？お、おい、開くぞこの扉。」

「ほんと？」

「ああ…」

なんか拍子抜けするな…

「う…」

中に入ると、とても暗く、鉄の臭いが充満していた。ものすごく吐き気がする。

「なんだ…？」

「圭一くん。これは…血の臭いだよ…」

「な…」

その時、部屋の中央で影が動いた。

「…人を入れてしまったか。まあいい。“食べばいい”。」

「え…」

その人影は、そう呟いた。俺たちは、その言葉にただ驚くだけだった。恐怖を感じながら…

「そろそろだな。“症状”が出始めるのは。」

そういうと、扉の鍵がしまった。

「え？」

「オートロックだ。」

「な…」

「あなたは…？」

「私はこの署長…まあ、アンブレラの社員でもある…」

「アンブレラ…？」

どこかで聞いたような…

「おっと、おしゃべりが過ぎたようだ…」

すると、だんだんと暗闇に慣れ、その人の体格が判った。五十歳前後の感じで、体格はしっかりしている。

「それではそろそろ、“喰う”としよう。」

すると、署長の体が盛り上がった。それは、どんどんと膨らんだ。

筋肉が盛り上がり、破裂しそうだった。

だが、そこから赤い液体が漏れた。すると、署長は吐血し、顔を苦痛に歪ませた。

「まさか、適正しなかったというのか？そんな…がっ！」

その巨体はさらに盛り上がり、ついには巨大な肉の塊のようになった。

「あああああああっ…！」

肉の塊は、恐ろしい叫び声をあげ、ゆっくりとこちらに歩きはじめた。

「あ…あ…」

怖い…どうなってんだ。こんなの今まで見たどのやつらより怖い。そいつは、俺に狙いを定め、右腕を降った。驚く程に遅く、俺は余裕でガードした。

「…っ！？」

だが、遅いぶんパワーはすごく、俺は飛ばされた。

「なっ…」

「大丈夫？圭一くん！」

「圭ちゃん！どうしたの！なんか叫び声が聞こえてきたけど…！」

その時、魅音たちがドアの外から話しかけてきた。

「今、長々と話す時間はない！」

「え？どういう事？レナ！」

「化け物みたいなのがいるの！」

「化け物みたいじゃねえ！化け物だ！」

「そっちは？魅いちゃん！」

「詩音たちのところにドアがあった！」

「そうか！じゃあ、ドアの隙間から銃を入れてくれ！」

「え？あ、うん！」

すると、下のドアの隙間から銃が三丁出てきた。

「こっちも念のため、銃一丁取っとくよ！」

「ああ！」

銃の中には、ライフルがあった。おそらく、詩音のだろう。

「詩音！ライフル借りるぜ！」

俺はライフルを手に持ち、頭に狙いを定めた。俺が撃つと、そいつは倒れた。でかい体を制御しきれなくなったのだろう。ゆっくりと

倒れた。

「よし!」

「圭一くん…何か様子が変わだよ…」

「なに?」

「ほら、なんか…息が、荒いよ。」

すると、そいつはゆっくりと起き上がった。

「もう、どんな事が起きても驚かねえぜ…」

俺は起き上がるそいつの背後に回り込み、銃を撃とうとした。しかし、銃を受ける箇所には、とんでもない物があった。

「目…玉?」

背中には大きな目玉があった。いくらなんでも、こんなのは見たことがない。

目玉はグロテスクに動き、落ち着きがない。

「あ…ああ…」

俺は余りの恐怖に、一瞬、動けなかった。するとそいつは、起き上がり、後ろを振り返ろうとした。

「圭一くん!早く!」

俺はその言葉に反応し、目玉に鉛玉を打ち込んだ。そいつは奇声をあげもがき、そして倒れた。目玉は回転し、白目をむいた。

「ふう…」

俺たちが安堵していると、そいつの口からカブトガニのような虫が大量に出てきた。

それは俺の方に寄ってきたが、踏み潰して殺した。が、それでもまだ数はいる。

俺は壁に背を向け、後退りした。だが、虫はすぐ死んだ。

「なんなんだ、こいつ…」

すると、ドアが開いた。オートロックのはずだが…

「お前たちが開けてくれたのか？」

俺は部屋から出て、聞いた。

「いや、おじさんたちは何もしてないよ。」

「え？」

「まあいいよ。早く行こう。」

「あ、ああ…」

俺はこの時気にも止めなかった。この部屋に防犯カメラがあったことに。

「T・ウィルス適合者…これなら、あの人を止められる。期待して
るわよ。前原圭一…」

第三話 危険（後書き）

いやーしかし、あいつ強いですね。化け物。
次回から、話は急展開です！

第四話 暴走（前書き）

今回、ひぐらしのサブキャラが一人死にます。

第四話 暴走

俺たちはさらに地下へと進み、研究所のようなところに着いた。

「…なんなんだ？ここは…」

「さあ…」

「どこかで見たとがあるのです。」

「確かに…」

「え？そうなの？」

なぜか、俺と梨花ちゃんしかわからないらしい。

「でも、どうして消防署の地下にこんなものがあるんですの？」

「おそろく…」

「あ！あそこに誰がいるよ！」

見ると、扉の近くに八歳前後の女の子がいた。

「君、大丈夫かい？どうしてこんな所に…」

だが女の子は逃げ出した。ちょっと傷付いた。

「あ、おい！」

しかし、なんでこんな所に…

「行こ、圭一くん。」

「あ、ああ…」

進むと、金髪の外国人が立っていた。

「…日本語通じるか？」

「大丈夫よ。」

女性は言葉を発した。よかった。通じるか。

「あなたは？」

レナが聞いた。

「教えないわ。」

「なぜ？知られたらまずいんですか？」

「…」

答えない。

すると、詩音が銃口を向けた。

「詩音！何してるんだ！」

「すみませんが、正体を明かさないのであれば、このまま引き金を引きます。さっきの署長のような線もありますから。さあ。」

「私の名前は、アネット・バーキン。あなたたちがさっき会った子は、私の娘、シエリア・バーキンよ。」

「なるほど……」

「ひとまず、銃を下ろしてくれないかしら？襲う意思はないわ。」

詩音は銃を下ろした。俺はホッと胸を撫で下ろした。

「実はね、あなたたちと、取引がしたいのよ。」

「取引？」

リーダー格である魅音が言った。

「ええ。」

「…その内容は？」

「あなたたちの脱出を手助けしてあげるわ。」

「なんだって！」

「まあ落ち着いて、圭ちゃん。…で、その代価は？」

「私の夫を止めて欲しいの。」

「止める?」

「ええ。私の夫はウィリアム・バーキン。僅か十二歳で大学に入った、天才博士よ。」

「なるほど。で、その人はどう暴走したのさ。」

「…あるウイルスを作って、それを自らに注射して、怪物になったの。そのウイルスは、こここの署長も注射されたわ。」

アネットさんがそう言う前に、少し迷った素振りを見せた。

「あの…さっきの署長みたいになってるんですか?」

「いいえ、似ているけど違うわ。」

「どづいづことですか?」

「そのウイルスは少し特殊なのよ。」

「どづいづぶつに。」

「一刻を争う事態だから、教えるわ。そのウイルスは、G・ウィルス。普通のウイルスと違い、体内で突然変異を繰り返し、寄生者の遺伝子を再構築するの。簡単な話、姿形が変わるのよ。」

かなりちんぷんかんぷんだが、くちばしを入れずに聞いた。

「ただ、G・ウィルスは子孫を生むため、宿主と融合するんだけど、

遺伝子構造が似ていないと、不完全なGの生体になり、体が内部から破壊され、宿主は当然死に至る。」

「それがさっきの署長みたいなものですか？」

「ええ、そうよ。」

なるほど…

「で、遺伝子構造が似ている場合は？」

魅音が話の続きを促す。

「さっきも言ったけど、遺伝子構造が似ている場合は、宿主と融合して、突然変異を繰り返すわ。そして、新たな宿主を見つけたら種を植え込むの。ただ、突然変異の仕方は予測不可能なのよ。」

「で、どうやって止めるんですか？」

そう聞くと、懐から注射器を取り出した。

「この、G・ウィルス用ワクチン『DEVIL』を打ち込んで欲しいの。早めにね。」

「解りました。」

「じゃあ、脱出方法について教えるわ。この先の一番下に、プラットフォームがあるの。もう発車準備は出来てるわ。」

「仕事を終えたら来てちょうだい。もちろん、私の夫も一緒にね。」

「あの子は？」

「私の娘よ。私が付き添う。それと、私も止められるよう努力するわ。」

「はい。」

「あの、ちょっといいですか？」

レナが聞いた。

「なに？」

「『アンブレラ』って、何ですか？」

「な！」

その時、アネットさんの顔色が変わった。

「それ…どこで聞いたの？」

「さっき、二二の署長が…」

「知らないわ。」

「そうですか…」

そう言うが、恐らく皆わかっている。この人はなにかを隠している。だが、無理に問いただして、取引が破綻したらシャレにならない。

「じゃあ。」

アネットさんは隠れていた娘、シエリアちゃんを連れ、上へ上がった。

俺たちは、地下へと進み、なぜか牢屋に出た。

「ここ…警察署と繋がってたのか？」

「そうみたいだね。」

俺たちが進むと、奥から巨大な影が現れた。俺たちはすぐ近くの曲がり角に隠れた。

そこから、さっきの署長のようなものが現れた。多分、あれがウィリアム・バーキン博士だろう。だが、さっきの署長とは少し違う。右腕が異様に太く、頭が左側に押し出されている。鉄パイプをもっていて、血が付着している。下半身は通常のままだが、逆にそれが不気味だ。だが、何より目を引くのは、右肩にある巨大な目玉。それは、さっきの署長の背中にあつた目玉のようなものだった。

「う…」

沙都子が顔を歪める。当然だ。俺でも気分が悪い。

「…行つたか。」

俺たちは、ウィリアムが現れた方向へ足を向けた。

「しかし、見ると行き止まりだぞ。何で…」

「圭一。あそこに何かが見えるのです。」

梨花ちゃんが指差したのは、一番奥の牢屋だった。行ってみると、そこには俺たちがよく知る人物がいた。

「大石…さん？」

返事はない。もう死んでいる…

「そうか。大石さんは興宮県警に勤務してるから…」

魅音が言った。

「だけど、何故…」

大石さんには、ひどい打撲の跡がある。そこで、俺はウィリアムが血が付着した鉄パイプを持っていたことに気付いた。

「なあ、さっきのあいつ…鉄パイプ持ってたよな。血がついた…」

「あ…！」

皆の顔が恐怖でひきつる。

「でも、その前にここから出よう。警察署だから警察もいるはずだ。」

「…」

…だが、俺たちはわかっていた。ここでは、希望を持つてはいけ
ない。

打ち碎かれたとき、絶望に引きずりこまれるからだ。でも、それ
も…と思わなければ、生きる意義を失い、すぐに死ぬ…

人間として死ぬか、文字通り死ぬか。その選択は、必ず間違う。
だからこそ足掻く。生きるために。新しい未来を切り開くために…

第四話 暴走（後書き）

大石：死にましたね。

すみません。物語上そうするしかなかったんです。

第五話 怪物（前書き）

今回から中盤に入ります。ちょっと第二部長いですね。

第五話 怪物

俺たちは警察署のさらに地下へと進む。

「ずいぶん奥に来たな。」

「そうだね。ウィリアムにも会ってないし。」

そう言っただアを開けると、いきなり何かか殴りかかって来た。なんとか防御し、相手を見ると、それはウィリアムだった。

「来たな…」

だが、このままではワクチンを射てない。

「みんな、こいつの動きを止めるぞ。」

「うん！」

ウィリアムが鉄パイプを振り上げる。俺たちは即座に散った。そのあと轟音が響き、床はへこんでいた。

「みんな！頼むぜ！」

俺はそう言いながら銃の引き金を引いた。その弾はウィリアムの頭に命中した。

「続くよ！」

続いて右から魅音が弾を飛ばす。

それは鉄パイプを持つ腕に当たった。一瞬、鉄パイプを落とすように見えたが、なんとか持ちこたえたようだ。

「くそ！」

だが一瞬の間はできた。レナが右肩の目玉に向かって弾を飛ばす。ウィリアムはたじろいだ。それは、今までにない一番大きな隙だった。

「そこだ！」

俺の声に反応し、詩音、魅音、レナも撃つ。

全て頭に命中。ウィリアムはさらにたじろぎふらついた。そして、下水道に続く穴に落ちた。

「あ！」

畜生！ワクチンを射とうと思ってたのに！

「仕方ない。先に進もう。いずれ追い付くはずだ。」

「その根拠は？」

「俺が言うから。」

「はあ……」

魅音がため息を吐く。

「よし、それじゃあ…」

おそらく、ウィリアムによって床がへこんだとき、その振動で床全体が歪んだのだろう。足場が崩れ、俺は転落した。

「うわっ！」

「圭一くん！」

俺は真つ逆さまに落ちていく。落ちていく最中、俺の胸にはは死ぬかも知れない恐怖が行き渡っていた。

「…くん！…ちくん！圭一くん！」

「う…うん…」

「良かった。」

「背中から落ちたのが不幸中の幸いでしたね。」

「圭一くん。ウィリアムさんは？」

まだ頭がくらくらするが、とりあえず頭を横に振った。

「そっか……」

「ま！大丈夫さ！」

「その根拠は？」

「おじさんが言うから。」

そう言って魅音はいたずらっぽく笑った。

「まあいいよ。行こう。ここは下水道だから、足元に気を付けて。」

「ああ。」

「にしても暗いな……」

「そうだね…懐中電灯があつて良かったよ。」

そういうと、下から水しぶきが上がった。俺たちは慌てて光を向けた。

「なんだ…?」

そこには何もいなかった。だが、よく見ると下に緑色の何かがあった。

俺は無言で銃を取り出し、撃った。

すると、巨大なカエルが浮かんできた。

「なんじゃこりゃ……」

「気持ち悪いほどにでかいね。」

その時、下から更にカエルが二、三匹飛び出して来た。

「なに！」

「今の銃声に反応したんだ！」

「くそ！」

俺はそいつらの頭をぶち抜いた。

「走るぞ！他がいるかもしれない！」

「うん！」

足場が水で走りにくいが、必死に走る。すると、梯子がある足場を見つけた。

「早く行くぞ！」

俺たちは足場にかけて上がり、必死に上がる。

気付くと、下ではカエルだけでなく、他のゾンビも蠢いていた。

「あぶねー。気付かなかつたらアウトだったな。」

「あんまり下を見たくないね。」

上がると、大きい道に出た。だが、下水道の臭いはまだ収まらない。

「良かった。床が見える。」

「何となく落ち着きますわね。」

「ん？なんだろう、あれ。」

魅音が棒の仕切りの奥を指さした。

「ん？緑色……」

だんだんと近づいて来る。その正体は、すぐにわかった。

「ワニ……？」

長い口に緑色の革、それに牙……どう見てもワニにしか見えない。

「ちょっと一回りでかいような……」

「ちょっとどころじゃないですね……」

「かなり……」

「でかい！」

体長20メートルほどのワニは、棒を突き破ってきた。

「勘弁してくれよ……一体全体どうなってんだよ。」

「恐らくT・ウィルスによる突然変異で巨大化したんでしょう。」

「冷静な分析をありがとう。詩音。」

「どういたしまして。お姉。」

「とりあえず撃て！こいつを倒さなきゃ進めない！」

「でも、弾かれますわ！」

「圭一くん！あれ！」

レナが隅にあるガスボンベを指差す。

「あれを爆発させよう！」

「ああ！みんな！気を引いてくれ！」

「OK！」

俺はガスボンベを出し、ワニの目の前に放り投げた。

「離れる！」

そういうが早いか、ワニはガスボンベをくわえた。

「え？」

俺は一瞬戸惑った。

予定と少し違う。俺の予想では、顔の前で爆破させるはずだったが…
まあ、的が狙いにくくなったただけだ。俺は引き金を引いた。

「当たれ！」

ガスボンベは爆発し、ワニは倒れた。

「ふう…」

「一番まともな敵だったな…いや、まずワニが巨大化したところでまずおかしい。俺の頭がおかしくなったか？」

「とにかく行くぞ。こいつが生き返るかもしれない。Ｔ・ウィルスに感染したからあり得る。」

「ほんと、化け物ですわね。」

「今さら言っても変わらないさ。」

「…ねえ、レナ。なんか、圭ちゃんかわったね。」

「うん。なんていうか…」

「余裕？」

「そうそれ。…何が圭一くんを変えたんだろっ。」

「なあ…」

第五話 怪物（後書き）

圭一くん変わりましたねー。少し不安です。

第六話 進化（前書き）

久しぶりの更新です。遅くなりすいません。

第六話 進化

「ん？」

俺たちは更に地下へ進み、研究所らしきものに再び出た。そして、奥に人が倒れていた。

それはアネット・バーキンだった。

「どうしたんですか?!」

「あ…あなたたち…」

アネットさんは、胸を腹を貫かれたらしい。腹部から大量に出血している。

「なにがあつたんですか!？」

「じ…G…が…進化している…」

「え?」

「もう…ワクチンは効かない…地下へ…」

「どういうことですか?!」

「シエリアを…頼む…わ…」

それきり、アネットさんは動かなかつた。その瞳には恐怖が映り、

光が宿ることはなかった…

「進化…か。」

「恐らく、何か鋭いものを持ってるね。」

「ええ。」

そうだろう。腹部から大量に出血しているんだ。銃でもここまです血しない。

「行こう。シエリアちゃんが危ない。」

「うん。」

俺たちは立ち上がり、研究所の奥へと進んだ。

「あ！」

「シエリアちゃん！」

研究所を更に奥へと進み、最下階へと下った俺たちは、シエリアちゃんを見つけた。

「よかった…探したん…」

「いやあああああああ！」

俺たちが近付くと、いきなり叫び声をあげた。かなり傷付いた。まあでも、怯えているだけかもしれない。

「大丈夫、何もしないから…」

俺が手を差し伸べる。

だがそれでもシエリアちゃんは怯えていた。その目には、恐怖が映っていた。

そして、疲れたのだろう、倒れ込んでしまった。

「ん？」

よく見ると、シエリアちゃんの腕に斑点ができています。これは、ウィリアム・バーキンにもついていた。

「まさか…Gに感染している？」

そう言った途端、シエリアちゃんは悶えた。

「そういえばワクチンは…」

「え、ええ…」

詩音が懐から注射器を取り出す。

「ん？」

なんか…

「変…」

その時、注射器は破裂した。中の液体が膨張したのだろう。

「あ！」

「やった…」

「どうやら、ちょっとした環境の変化で駄目になるようですね。」

「でもどうしますの？このままじゃこの子…」

沙都子がそう呟いたが、それに合わせてレナが言葉を放つ。

「心配ないよ。」

そう言ってレナは研究所の見取り図の一部分を指差した。そこには、

「B-79 ワクチン生成室」と書かれていた。

「このエレベーターから行くのか…」

「そうだね…」

俺は魅音と行くことになった。なぜかわからないが、魅音がレナにここにおいて欲しいと懇願したからだ。それに、隣で魅音が妙にそわそわしている。なぜだ？

そうこうしている間に、目的の最下階に着いた。

「うわっ。」

「強行突破…だな。」

前には大量のゾンビが壁を作っていた。
俺はゾンビの頭を打ち、次々とぶっ飛ばした。

でも、ハンドガンだけじゃ物足りないな…今はハンドガンしかないけど…

「圭ちゃん！もういいよ！」

「なに言ってるんだ。一匹残らず殺^やった方がいいだろ。」

「おじさんたちの目的は、ゾンビを殺^やすことじゃないよ！」

「…チツ。わかった。行こう。」

俺たちは、ゾンビを二、三匹残し、B-79へと向かった。

「圭ちゃん！人が！」

「なに！」

俺たちが目的の部屋の目前に着いた時、そこには人が倒れていた。

「…小此木？」

「小此木造園の…どうしてここに？」

「逃…げ…ろ…」

「小此木さん！」

「だ…誰か…知らん…が…じ…G…は…危険だ…ウィリアム…は…
シエリアを…追って…いる…逃…げ…」

そして小此木さんは息絶えた。

「…G…か。」

「なんか…おじさんたちの知らないところで、勝手に話が進んでる
ね。」

「ああ…まあ、今はそんなのどうでもいい。」

「うん。ワクチンを…」

その後、ワクチンで元気を取り戻したシェリアちゃんは、この下に列車があると話した。俺たちは、更に地下へと降りていく。

「…さて、G・ウィルス回収に小此木とハンクの第五隊を向かわせたが、ハンク以外死亡した。」

「大体は予想できたことだ。ウィリアムのやつのことだからな。で、肝心の『死神』ハンクは？」

「ウィリアムにG・ウィルスを破壊されたい。あいつのことだ。死にはしないだろう。」

「ウェスカー…お前なにを企んでいる？」

「なにがだ？」

「とぼけるな。“上”からもG・ウィルスを奪還する必要はないと出たはずだ。」

「ああ。だが、ウィルスがあればあるほど良いだろう？」

「…お前は…」

「さて、そろそろ終わりだ。予定が詰まっているのでな。」

「くっ…」

第六話 進化（後書き）

今回は少し短めでした。遅らせておいて申し訳ありません。

第七話 妨害（前書き）

そろそろクライマックスですねー。
圭一たちはどうなるんでしょう。

第七話 妨害

俺たちが地下へと進む途中、大きな交差路に入った。下はずっと地下に続いていて、手すりで落ちないようになっている。一瞬迷ったが、よく見れば扉の近くの札に書いてあるので、俺たちは「非常用プラットホーム」と書いてある扉に向かった。

「後は列車に乗るだけか…」

「なにもないと良いんだけど…」

俺たちがコンピューターのある中心に着いた時、

…魅音の予想は当たった。

「グガア、ア、ア、アアアアア！」

大きな“何か”が、拳を落として来た。なんとかよけるも、その拳がコンピューターに当たり、コンピューターは故障した。

「くっ…まさかこいつ…ウィリアムか?!」

ウィリアムはもう見るかげもなかった。署長のように全身は肥大化胸にはイソギンチャクのようなものが蠢いていた。全体的に見たとき、もうそれは人間ではなかった。半魚人のようなものだった。

「圭一くん！前！」

レナがそう叫んだ時、ウィリアムが足を後ろに上げていた。ウィリアムの足が降られる。

「ぐっ…っ」

俺はそれを防御したが、防御の意味は無く、俺は2メートルほど飛んだ。クソッ…なんて力だ。

「早く行け！俺が足止めする！」

「うん！」

レナたちはドアに向かった。

「だめだ！開かないよ！」

「コンピューターが壊れているからだ！」

「クソッ…どうすりゃ良いんだよ！」

その時、アナウンスが響いた。まさか…

『マザーコンピューター大破、マザーコンピューター大破。復旧します。あと五分。繰り返します。復旧まで、あと五分。』

「なんだ…驚かせやがって…」

また爆破かと思っただじやないか…

「要は五分間耐えりゃ良いんだな。」

「うん！」

「その間にこいつ倒せれば一番だな。」

ウィリアムは背を向け、腕を振り抜き、裏拳を飛ばしてきた。俺はそれを手で受け止める。俺の腕は痺れ、銃を落とした。これでは少しの間腕は動かない。

「チツ、やっぱりすげえパワーだ。」

「大丈夫ですか?! 圭ちゃん!」

「任せる。心配すんな!」

ウィリアムがまた拳を降り下ろす。俺はそれを避けた。しかし、任せるとは言ったものの、このままじゃ決着がつかない。せめて腕の痺れがなくなれば…

「避け続けるしかないか…」

俺が即座に距離をとった。ウィリアムを突進して来ながら、手を振り上げていた。もうパターンはわかる。が…

「…え?」

ウィリアムが消えた。いや、どこにいるかはわかる。だが、予想していたのは違った。

「跳んだ…」

ウィリアムは上にいた。拳を振り上げたまま…

俺はとっさに走り出した。あれはヤバい。恐らく死ぬ…
そして後ろで、心地いいほどの轟音が響く…筈だった。だが実際に
は…

“ 何か折れる音がした。”

その直後の足首からの激痛が、俺に悟らせた。

“ 足ガ折レタ”

「ぐああああああっ！！」

俺はそこで悶え、ウィリアムは更に拳を振り上げる。
ここまでか…

パン

そこに、詩音のライフルがウィリアムの頭に当たり、ウィリアムに
隙が出来た。

その間に、レナが俺の元に駆け寄り、俺に肩を貸した。

「圭ーくん！もう扉は開いたよ！行こう！」

「あ…ああ…」

「早く！圭ちゃん！レナ！」

俺たちは走り、詩音はライフルを撃つ。

ウィリアムは、頭を撃たれた衝撃で、ふらつき、下へ落ちた。

「…行こうか。」

「うん。」

俺は一人で歩けると言っ、地を踏む度に電流が流れる足を上げながら、顔は何事もないかのように繕った。その時。

「圭ちゃん！後ろ！」

魅音の言葉に即座に反応した俺は、ホルスターから銃を抜きながら振り向いた。

そこには、さっきの胸のイソギンチャクが頭に移動した、ウィリアムだった。

俺は動揺しながらも、即座に引き金を…引こうとした。

「ぐあっ！」

その時足に激痛が走り、当たったのは肩の部分だった。それでも、足止めは成功した。

「早く行くよ！」

どうやらまだ俺が大丈夫でないことはばれていない。俺は冷や汗をたらしながら地下へと向かった。

「…うわ。」

「人間…いや、ゾンビバリケードだな。」

あと少しというところで、大量のゾンビが足止めしていた。
はっきり言って…邪魔だ。

「どつするっ？」

「どつするって…こつだろ！」

俺はポケットから手榴弾を取り出し、ストッパーを外した。そして、
うごめくゾンビたちになげつけた。これがいちばん早いだろ。

「あ…」

「どうした？なんかあったのか？」

「いや…もつちよつと…」

「もつちよつとなんだ？俺はこれが一番手っ取り早いと思ったんだけど。」

「ああ…うん。」

魅音がなにか言いたげな顔をしているが、なんだ…？

「どうした？言いたいことがあったら言ってくれ。」

魅音は一瞬迷っていたが、少し控えめに口を開いた。

「なんかさ…圭ちゃん変だよ。」

「なにがだ？」

「だって、さつきワクチンを取りに行った時も、ゾンビを必要以上に倒していたし、早く行こうって言った時も残念そうな顔をしたし…今にしたって、なにかゾンビを倒すことを楽しんでるように見えるんだよ。」

「だから？」

「なんか…いつもの圭ちゃんじゃなくて、不安なんだよ。」

「仕方ないだろ。倒さなきゃ進めないんだから。」

「でも、それに楽しさを見出だすなんて、おかしいよ！」

「だから！それでもしなきゃやってらんねえだろ！」

ただでさえイカれそうなんだから！

「だからって、圭ちゃんが一人なわけじゃないよ。私たちがいるんだから、そんなことないよ。」

「…チツ。ああ、わかったよ。」

「ほんと？」

「ああ、お前らは、こんな地獄でも正常な精神を保てる、タフな奴らだっことがな。」

「え？」

「常人だったら狂うんだよ。俺がおかしいんじゃない。お前らがおかしいんだ。」

「…っ」

「いいか？T・ウィルスはな、ただ人間をゾンビにするんじゃない。人間を…狂わせるんだ。」

「圭ちゃん…」

「もしくは、お前らが黒幕か？雛見沢全体で、T・ウィルスを作ったんじゃないのか？」

「そんな…ちが…」

「おれは！」

その叫び声に、みんなは体を震わせた。

「人を食ったり、背中が痒くなったり、ごめんだ。全て駆逐する。ゾンビも…それを作った人間も…」

俺はただ立ちすくむ仲間を尻目に、地下へと向かった。

「Mr.入江。どうだ、“例のウイルス”は。」

「…っ。“例のウイルス”は、ほぼ完成です。あと人体実験のみです。」

「そうか…ならば適格者がいる。」

「誰ですか!?!」

「クツクツ…」

「アルバード・ウエスカー！」

「もっと敬意を表せ。教えてもらいたくばな。」

「…っ」

「クツクツ…俺に頭を下げるのが、よほど屈辱とみえる。まあいい、こちらとしても、お前がウイルスを作るだけでいいからな。」

「なにを企んでいるんですか。」

「ん？」

「興宮病院で診察をするだけの医師に、身内を人質にして新しいウイルスを作らせるなんて。」

「人質？…ああ、“あの子供たち”か。人質とは人間の悪い。ただ単に、取り引きの道具じゃないか。お互いの利害が一致した。ただそれだけだ。」

「なにを…！」

「私にはまだやることがある。そろそろ失礼するよ。」

「…わかりました。」

「こちらハंक。」

『ウエスカーだ。』

「G - ウイルスは…」

『ああ、その件はもういい。』

「と、言うと…?」

『一人、人を連れてきてほしい。恐らくその研究所にいるはずだ。別につれてこなくてもいいが、出来るだけ…』

「わかりました。その人は誰ですか?」

『…だ。』

第七話 妨害（後書き）

次で第二部は終わる…かな？

第八話 離別（前書き）

第二部は次のエピソードで終わります。

アクセス三万を達成しました！ありがとうございます！……これからも頑張ります！

第八話 離別

プラットホームへと降りた俺たちは、列車の鍵を探すため、管理所へと向かった。

その後、レナたちとは口をきいていない。

「さて…鍵は…引き出しの中か…鍵がかかっているな。」

俺は銃を取り出し、引き出しに向かって引き金を引いた。引き出しは鋭い音をだし、鍵は壊れた。

「これでいいだろう。行くか。」

「…」

わかっている。何を言いたいかは。だが、それを聞く気にはなれなかった。

「後は電車をとばすだけか。」

俺は列車の扉を開けるために、管理所を出た。

「ウエスカーは何を企んでいるのだろうか。G・ウィルスを奪還しろといい命令を何事もなく撤回、今度は人を連れてこいなどと…ん？こいつは…アネットか。ウィリアムに殺られたのだろう。…懐に銃などはないかな。銃が切れそうだからな。…あつた。ハンドガンだけか。まあいい。さて、実験台を探すか。」

俺たちは、列車のエンジンをかけ、線路の上を疾走する。

「この先に、光があるんだ…」

その時、後ろの車両で轟音が響いた。ドアを開けると、壁には、巨大な肉塊ができていた。

「なんだこりゃあ!」

そしてその肉塊はさげんだ。さげんだといつても、呻き声に近かった。

『シエリーイイイイ！！』

「ウィリアム!？」

とその時、肉塊の中心に口のような巨大な穴があいた。

「ちつ…だが、それでこそ“壊しがいがある”!」

俺は銃を取り出し、ウィリアムに近付いた。

「圭くん!危ないよ!一人で戦うのは!」

「うるせえ!」

その声にレナは体を震わせた。俺は憎さげに、聞こえるように呟いた。

「…ゾンビも殺せない偽善者は黙って見てろ。邪魔をするな。」

「そんな…」

「見てて腹が煮えくり返るんだよ。何が一人じゃないだ…結局、俺とお前らの心はバラバラ。倒さなきゃ前に進めない。お前らは、ただ単に常識を守っているだけ。“いつもの”常識をな。

俺は“今の”常識を守っているんだ。…地獄のな。」

俺はそう言い終えると、肉塊から伸びる触手を狙い撃った。

「気色悪いな…粉微塵にしてやるぜ。」

俺は“前だけ”を見て、ウィリアムへ弾を飛ばす。俺は迷わなかった。

「魅いちゃん…」

「…みんな。圭ちゃんがああ言っているんだ。まかせよ。」

「お姉正気ですか！圭ちゃんを見捨てるんですか！」

「そうですね！圭さんは私たちの仲間です！ごぞいましてよ！」

「魅音。私たちは一人でもかけてはだめ。みんなで脱出するのよ。」

「圭ちゃんは、多分、邪魔はするなって言っさ。」

「それでも…もしも負けたら？」

「圭ちゃんはT-ウィルス適合者なんだから、大丈夫だよ。」

「でもせめて、援護ぐらいは…」

「じゃあ、勝手にすれば。おじさんは知らないよ。」

「魅いちゃん…」

「みんなの心はバラバラ…圭一の言った通りになってしまった。このままじゃ…」

「死ね死ねシネ！ウツデイ！」

“俺一人”がウィリアムに立ち向かう。俺は一切疲れず、触手を落とす。

「はっ！でかくなっただけかよ！」

『シエリーイイイイ！』

その時、触手がすべて一斉に飛びかかる。
一、二個しか落とせず、俺は捕まれた。

「くっそ…っ。悪あがきかよ…」

俺は僅かに動く腕を動かしポケットをまさぐった。取り出したのは手榴弾。

「死ねえ！」

俺は栓を外し、ウィリアムの口の中に放り込んだ。ウィリアムの口の中からは黒煙が立ち上り、ウィリアムは悶えた。同時に触手も俺を離れた。

「しっかしタフだ…このままじゃ地獄の果てまでついてくるぞ。」

どうする…？

その時、ウィリアムの下にある連結器に目を着けた。

「さよならだ！ウィリアム！」

俺は連結器に向かって引き金を引いた。連結器は外れ、ウィリアムが少しずつ離れて行く。

「よっしゃあ！」

が、ウィリアムは油断した俺に触手を伸ばした。触手に掴まれ、一

緒に俺は列車から遠ざかる。

「圭くん！」

「レナアアアアア！！！！」

列車が遠ざかるなか、俺は投げ飛ばされた。

『残り十分です。』

「こいつが前原圭か…？打ち身が酷いな。まあ、こいつを連れて帰ればいいのか。幸い気絶しているから、楽だ。さて、帰るか…」

「魅いちゃん！やっぱり援護していれば、圭一くんは…！」

「うん…でも、もう圭ちゃんは…いや、ごめん。」

「圭一は死んだの…？」

「ごめん…圭ちゃん…」

「いいえ。圭一さんは生きていますわ。」

「ええ…きつと。」

第八話 離別（後書き）

第三部はどうなるんでしょう。きになりますね。

エピソード（前書き）

第二部は終わりました！次が第三部、終わりです！

エピソード

「…先週興宮で起きた集団猟奇殺人事件と同じ出来事がアメリカ、イギリス、中国、南アフリカ等で起きたことがわかりました。これらの事件の生存者は、皆、その事は思い出さたくないと言っており、事件の解決は困難です。そして、生存者の中には、いきなり凶暴化し、襲いかかる者もいて、ますます事件は混乱しています。この事件による死亡者が…」

私はテレビを消した。…どうやら、アンブレラの仕業だということ
は判明していない。

あの事件以降、監督は行方不明だ。圭一も、わからない。初めて、
運命の袋小路から抜け出せたのに、肝心の圭一がいなければ…
私たちは、同じくバイオハザードが起きた地区の生き残りと共に、
アンブレラを潰すためアンブレラの支部を一つずつ潰している。
前原圭一は、T・ウィルス適合者として、指名手配されている。あ
くまで保護するためだが。

「…梨花。」

「…あら、羽入じゃない。何？」

「ボクにはわかるのです。おそらく、次の出動の時に、全てが決す
るのです。」

「…それは、アンブレラの話？もしくは…」

「後者です。」

「あらそう。」

私は普段のように接したが、内心飛び上がりたかった。

「梨花。舞い上がるのは…」

「わかってる。命取りでしょ。」

「…ええ。」

次が最後：羽入が言うことが本当なら、気を引き締めなければ。私は、運命の袋小路から、抜け出してみせる！

エピソード（後書き）

第三部は、オリジナルの話にしようと思っ
てます。

第三部 ALL END プロローグ(前書き)

第三部はじまりました！伏線を回収しきれるか…

第三部 ALL END プロローグ

「…おじいちゃん。私はここまで来たわ。難見沢症候群…おじいちゃんの研究を、成功させてみせる。どんな手を使っても…」

「突撃！」

司令官の号令と共に、武装兵隊がなだれ込む。その手には機関銃が握られていた。

「およそ五百か…。そろいも揃って懲りないな。その武装何回死傷者が出たと思っっているんだ。」

その状況を文字通り高見の見物していた、アルバード・ウエスカーが呟いた。俺は対して皮肉そうに笑った。

「馬鹿なのさ。どこにお前がいるかが解らないほどに。この三ヶ月

間、余りにも暇だったからな。にしても、俺も三ヶ月で英語がここまで上達するとは。」

俺は自嘲気味に笑った。

「まあいい。しかし、挟みうちだぞ。」

「どうということだ？」

ウエスカーはコンピューターのモニターを見せた。

「裏口の映像だ。」

そこには、金髪の長髪をなびかせた美女が写っていた。

「成る程、確かに挟み撃ちだ。」

「どっつする？」

「“取り分”てことか？」

「ああ。」

「俺は裏に行くよ。借りがあるんだ。」

「ならば、俺はここで待とう。」

「なに？」

「俺に五百を相手にしろと？」

「楽だな。」

「否定はしないさ。“セキュリティ”が足止めしてくれる。」

「実験室の鍵を開けたただけだろう?」

「ははは。まあ、裏口への道は確保してやる。」

「そうしてもらつと助かる。」

俺は銃が大量に携帯されているコートを羽織り、自動ドアを潜った。

「…ここが最後に残った、東京支部か。」

「みい。魅音、どうしてここを最後にしたのですか?」

「それは?」

「首都だから、いちばん怪しいはずなのです。」

「ここは、原型を留めていたけれど、『東京』がつぶれたから、電気も通っていないはずだったんだ。だから、潜伏には不向きと判断したんだ。」

「では、なぜ電気が通っているんですの？」

「わからない。おそらく、自家発電装置がまだ機能しているんだと思う。」

「ここに…圭一くんがいるのは間違いないんだね？」

「うん。…まだ生きているのが前提だけど…」

魅音が低い声色で呟いた。自信がないようだ。それはそうだろう。ウィリアムに投げ飛ばされたあと、居場所どころか、爆発した研究所で遺体もないのだ。灰になったか生きているか…それすらわからない。

その時、無線がかかってきた。

『扉が開いた！出動だ！』

「はい！」

私と沙都子は拠点の車に残り、魅音と詩音とレナはヘルメットをかぶり、車の扉を開けた。

第三部 ALL END プロローグ（後書き）

第三部の題が英語なのは、かつこよかったからです。（笑）

第一話 因縁（前書き）

第三部はじまりました！内容は完全オリジナルです。

第一話 因縁

ウエスカーが上手くセキユリテイ操作をしてくれたお陰で、俺は難なく裏口にたどり着いた。そして、無線によると、すぐ近くの角に
にあいつはいるらしい。俺は撃鉄を引き、銃を構えた。

すぐ近くで足音がする。俺は安定している…ここで…決着をつける
…！

俺は銃口を前に向けながら、角を曲がった。

「鷹野…お前と」

俺は言葉に詰まった。鷹野はやつれはて、目には隈、ここ何日寝て
いないようだ。しかも、取りつかれたように、何かを呟いている。

「私は…おじいちゃん…研究…認め…」

「鷹野…？」

「あなたたちのせいで…あなたたちの…あああああああ！」

鷹野は突然銃を発砲した。

「フツ…予想はしていたが、ここまでとはな…美人が台無しだ。だが…本当に生きていたとはな。」

話は二ヶ月前…

「つまり、鷹野は生きていると?」

「ああ。鷹野は、雛見沢での事件で、お前の証言によると、タイヤントに腹部を貫かれた。が、おそらくあの鷹野だ。研究への執念で脱出したのだろう。」

「どうやってだ?脱出手段は電車だけのはずだ。」

「おそらく、屋上のヘリコプターだろう。」

「あの怪我でか？」

「それしか考えられん。鷹野の執念はそれほどのものなのだ。」

「未恐ろしいな…で、肝心の怪我は？」

「小此木の手を借りて、そこら辺の病院にでも入院したのだろう。」

「そうか。しかし、なぜ鷹野はそこまで、研究に没頭したんだ？」

「わからん。ただひとつ言えることは、あいつは、生半可なことで死なん。」

「頭を撃ち抜くしかないか。」

「それはゾンビだろう？」

「同じようなものだ。」

「鷹野。…俺は、お前を殺す。」

銃弾を余裕で避けた俺は、鷹野にそっぴい放った。

「うるさい…うるさい…」

鷹野は、懐から注射器を取り出した。

「なにすんだ…？」

「この体を使って…」

鷹野は、自分の腕に針を刺した。

「ああああ…！」

「鷹野！まさかそれは！」

「新しく…作った…」

「なに？」

「雛見沢…ウイ…グッ…ガッ…ブゴッ…ア…ア…ア…ア…ワタシ
ガ…オ…ジイ…ギヤアアアアア！」

鷹野は…目の前で血を吐きながら、白目を向き、体中から血を吹き出した。耳から…目から…この地獄で見てきた中でも…

「やめる…やめてくれ…」

どうして…みんな狂うんだ…

その時、俺の脳裏には、あの言葉がフラッシュバックした。

『常人だったら狂うんだよ。俺がおかしいんじゃない。お前らがおかしいんだ。』

「自分でもそう言ったじゃないか…今更…なにを…言うんだ。」

俺は銃口を鷹野の頭に突きつけた。

「そのウイルス…効果、見せなくていいよ。」

「アゝアゝアゝ…」

引き金を引いたとき、辺りは紅に染まった。俺の服も…

「これで終わりか…呆気なかったな。」

俺は銃口を降ろした。

「戻るか…ッ!？」

俺は、雛見沢ウィルスの恐ろしさを知った。

第一話 因縁（後書き）

雛見沢ウィルス：なんなんでしょう。
みなさん当てる見ましょう。（笑）

第二話 対立（前書き）

起承転結の「起」の終わりです

第二話 対立

「特別班とCチームは最上階のセキュリティルームへ直行！Aチームは一階を確保、B、Dチームは探索を開始！」

私の号令と共にそれぞれが散らばる。私たちはセキュリティルームへと向かう。セキュリティを解除し、探索しやすくするからだ。しかし、なぜかゾンビがおり、そこら中で発砲音と閃光と銃弾が飛び交った。

「レナ！詩音！エレベーターだ！乗り込むよ！」

轟音がこだまする一階で、レナと詩音、そしてCチームと共にエレベーターに乗り込んだ。エレベーターは広く、20人すっぽり入った。

扉が完全に閉まると、耳鳴りがするほどに静かだった。さらに皆、一言どころか物音すら出さなかった。如何に今が緊迫しているか、客観的にみてもわかる。

「みんな…わかっているね？これは人類を救う戦いなんだよ。」

「うん…そして、私たちの決着をつける戦い。」

「バスに残った沙都子たちが待ってますしね。」

そして、扉が開いた。

「鷹野…っ！」

俺は歯軋りをしながら、怒りに燃えた目で鷹野を見つめる。

「あんなに人の命を奪って起きながら…今度のウィルスは…それか
！」

鷹野は…“立っていた”。額の中央には、あながあった。銃創だ。

「あ…お…」

「自分が死ぬのは…たおれるのは嫌か！」

「お…じい…ちゃんの…」

少しずつ呂律が回ってきたらしい。どうやらこのウィルスは、人格を完全に破壊するわけではないようだ。おそらく、難見沢ウィルスの効果…それは、「不死身」。脳へのダメージも関係ないのだろう。自己修復能力が高いようだ。

「じゃあこれならどうだ！」

俺は手榴弾を投げた。すぐに後退し、目の前で爆発が起きた。これで体は粉々だ。

鷹野は右半身を失って倒れていた。

「これでいいだろう…」

俺が鷹野に背を向け何歩か歩くと、背後に気配がした。

「まだいるのか…？」

俺が振り返ると、鷹野は“両足で立っていた”。

「なに…！？」

俺は又手榴弾を投げた。今度は背を向けず、両足と右腕が吹き飛んだことを見届けた。

「今度こそ…！」

俺は不安げに呟いた。俺の不安は的中した。

鷹野の両足と右腕は、急速に生えてきた。まるで内臓が破壊されるような音を出しながら…

「からだを完全に粉々にするしかないのか…？」

俺は堪らず、来た道を辿るように走った。

「どうした圭一？借りは返したのか？」

「…いいや。」

俺は息を荒くしながらウエスカーの元へ戻った。まだ恐怖は収まらない。初めてゾンビを目にした時を思い出した。気色が悪いしぶとさ…その時の衝動で、思わず駆け出した。

「新しいウイルスを作ってやがった…脳のダメージも意味がなく、体を吹き飛ばしても急速に再生する…不死身だ。」

「ウイルスか…あいつ“も”作ったか…」

「なにか言ったか？」

「いや、厄介だなと。」

「ああ。」

「さて、下が騒々しい。場所を写すぞ。」

「ああ。」

俺たちは“セキュリティルーム”をあとにした。

「この角を曲がるとセキュリティルームだ。」

私たちはエレベーターから降りた後、一番奥のセキュリティルームに直行した。角の手前に来た時、角から声が聞こえた。

「邪魔なゴキブリどもめ。」

それと同時に私の隣のＣチームの人間が、“ヘルメットの中から”血を吹き出し昏倒した。

「そこをどけ。」

曲がり角に金髪のオールバックにサングラスをかけている男が立っていた。片手で銃を握りながら。

「ヘルメットを貫通した…？」

「あれは…マグナムだ！」

「なんだと?! マグナムを片手で…」

「お前は…？」

ざわめく背後を尻目に、私はそいつに質問した。ここにいる時点でアンブレラの人間であるのは間違いない。

「アルバード・ウエスカー。」

「お前が…？」

アンブレラ最高幹部のアルバード・ウエスカー…指名手配中の人物…アンブレラ掃討作戦の最重要標的…

「あなた一人…？」

「いや…」

「だれ！」

「見ればわかる。」

「…なかなか、劇的な再会じゃないか?…なあ。」

「…え？」

聞いた事のある声。明るくはきはきと、思わず聞き惚れる声。茶色のロングシヨートに整った顔立ち、紫の瞳。嬉しさを押さえきれず、思わず呟いた。

「圭ちゃん…！」

「圭くん…！」

レナはヘルメットを脱ぎ、圭ちゃんに近付いた。

「良かった…生きてた…！」

私たちは涙が出そうになった。そして、涙が目にとまりきった時…

パン！

…涙はこぼれた。

第三話 驚愕（前書き）

今回は裏切り？

第三話 驚愕

「どづし…て、圭…くん。」

レナは肩から血を出していた。圭ちゃんの拳銃の銃口からは、硝煙が上っていた。

「フツ…」

笑った…

なぜ？ 私たちと再会できたから？…いや、あの笑みは違う…

「残念だが、俺は過去を捨てたんだ。馴れ合いはよせ。」

「へ…？」

「冗談…だよな？」

「証拠を見せてやるよ。」

圭ちゃんは銃を私に向けた。

「圭ちゃん…！」

パン！

「…へ？」

外れた…？

「お…俺？」

その言葉に反応し、私は振り向いた。

見ると、Cチームの一人のヘルメットがへこんでいた。

「ま…まさか、俺を殺すのか…？い…嫌だ…」

「だめ！」

「うあああああ！」

隊員は背を向け、逃げ出した。

「…へつ。馬鹿が。誘導されているとも知らずに…」

圭ちゃんは新たに銃を取り出した。

「…ライフル…」

「…」

圭ちゃんは笑いながら、コッキングを引き、“片手”でライフルの引き金に手をかけた。

「ふせて！」

「これが証拠だ！」

圭ちゃんは引き金をひいた。向こうで赤い液体が吹き出ていた。

「入江陸佐！身柄を高速する！」

「！」

「そこまでだよ。入江陸佐。…とは言うが、形式上のものだからね。こっちは繋がっているからね。」

「…やっと来てくれましたか。」

「ああ。まさか神奈川支部の地下とは、大胆なことをしたね。君一人だよ？」

「…銃は残ってましたから。いざという時には…」

「圭くんたちは『東京』かい？」

「ええ。恐らく。」

「そうか。本部には許可をとってある。突入だ。」

「わかりました。“富竹二尉”。」

「さて、交換条件と行こうか。」

いきなりウエスカーが銃を取り出し、魅音の額に銃口を突き付けた。

「この場を退いてくれないか？今だけでいい。さもないと…」

ウエスカーはリボルバーの撃鉄を引いた。カキツと音がなり、指は引き金にある。

「…わかった。」

「物分かりがよくて助かる。」

「今私達が優先すべきなのは支部を破壊する事。こいつらは後回し

にしなきゃ。」

そう言つて、皆道を開けた。魅音はうなだれていた。

「…またな。」

俺はうづくまつている魅音の頭に手を置きすぐ離れた。魅音は動か
なかった。俺は振り返ることもなく、エレベーターへ向かった。

「なあ…本当に、これでいいんだな？」

「ああ。上出来だ。」

俺は動くエレベーターの中、ウエスカーに話しかけた。

「そうか…フツ。なかなか楽しかったぜ。」

「邪魔な奴らだがな…」

「それじゃあ、化け物を檻から出すとするか。」

俺たちは地下二階で降りた。

「レナ、大丈夫？」

「うん。」

「一応応急処置はしておきました。」

「ありがとう。詩いちゃん。」

「セキュリティの方はどう？」

「コントロールするにはあとパスワードだけです。あともう少しで解析します。」

「わかった。」

「お姉！これ！」

「どづしたの？」

「これ、『前原圭一実験ファイル』って…」

「え…？」

「出来ました！セキュリティを解除します！」

『シャッターが開いた！降りてこい！』

「は、はい…」

私達はファイルに目を通すこともなく、下へ向かった。

第三話 驚愕（後書き）

そろそろアクションをいれよかな？

第四話 殺戮（前書き）

はい。戦闘シーンは出来ませんでした、すみません！

第四話 殺戮

「まったく、俺にはさっぱりだ。」

ウエスカーがキーボードをいじっている側で、俺は壁一面モニターの部屋を眺めていた。

「せっかくだから覚えてみるか？」

「やめとくよ。俺の頭がショートしそうだ。」

「フッ…」

そしてしばらく待つと、アナウンスが響いた。

『セキュリティレベルを0に引き下げました。』

「思惑通りか…」

「一階は地獄絵図だな。」

「フッ。で、これからどうするんだ？」

「今度は地下三階へ行って、“回収”するだけだ。」

「本当に…“俺の血液から抽出したT-ウイルス抗体”と、“応急用T-ウイルス抗体”で作った血清が、T-ウイルスを殺菌するのか？」

「ああ……」

「その為に血液採取をしたんだからな。」

「百も承知だ。」

「ならいい……」

…実際、血清は出来た。実物も見せてもらった。効果も…
だが、なんだこの違和感は…？

「どうした、行くぞ。」

「ああ……」

「魅音指揮官！第七捜査班が壊滅しました！」

私達はゾンビを掃討した後、探索をしているときに、その報告を聞

いた。

「えー？どづいうこと！？ゾンビ程度に負ける武装じゃ…。…いや。」

「魅いちゃん？」

「一階の見取り図は！？事前に準備しているでしょ！？」

「は、はい！これです！」

私は白い床の上に見取り図を広げ、ある場所を指した。

「たしか…ここが第七捜査班の担当エリアだよな？で、近くにあるここは？」

「そこは…」

私は頷き、こつ呟いた。

「B・O・W・最重要実験室。」

その時、立て続けに無線がけたたましく唸った。

『第二捜査班壊滅状態！未確認B・O・Wによってほぼ全員戦闘ふっ…グボア！』

『こちら…第五医療班…滞在…している…部屋で…未確認B・O・Wに襲撃され…ゴトッ…』

『はあ…はあ…こちら第三捜査班…未確認B・O・W…によって…
ワアアアア！来るなあああ！！グハツ！…』

『こちら第六捜査班！未確認B・O・W…によって壊滅状態！交戦
中により、援護を求む！場所は一階ロビー！至急、援護を求む！』

「全部未確認B・O・W…？」

「複数出ているのか…」

「これはきついかもしれないね。」

「とにかく行こう。」

「うん！」

「培養成功か…？」

「ああ。大成功だ。」

ウェスカーは培養した血清を回収していた。血清は注射器十本入りポケット五個分だ。

「…ん？」

十…二十…三十…四十…五十…五十一？ああ培養元の血清か…

「さて、屋上へ行くぞ。脱出だ。」

「そういえばなぜここに滞在したんだ？かなり前に培養は終わっていたんだろ？」

「ここに来たということとは、ここ以外は全て制圧したということだ。理由は話しただらう？」

「ああ。」

「来る前に下手に動くと、見つかる恐れがある。だから、空いた所にまた滞在するには、今がベストなのさ。」

「俺はそうしたら放浪する事にするよ。」

「まあ、両方の目的は達成したしな。」

「お前は各地を転々とするのか？」

「いや。」

「じゃあ…」

「“これ”を使って金儲けをするぞ。」

「…なるほど。」

「じゃあいくぞ。」

「なあ。」

「ん？」

「アンブレラの研究資料にあったっていうあれ…名前は？」

「…あれは元々ハンターの最終段階としてのものだ。」

「にしては馬鹿でかかったがな。タイラントぐらいか？黒かったしよ。で？」

「ハンター（オメガ）。驚異的なスピードとパワー、従来のタイプよりも高い知能をもつ、最高のB・O・Wだ。」

「そんなものを“三体”も放したのか。大迷惑だな。」

「まあな。」

「さて…何人生き残るか…」

「残るのは血の海と肉だけだ。」

「だと、一階には寄り付きたくないな。」

「そうか。」

「まあいい。行くぞ。とつとつとんずらだ。」

「ああ。」

第四話 殺戮（後書き）

次回こそ戦闘シーンです。次回こそ

第五話 殺生（前書き）

すいません！

更新が大分遅れました！本当にすいません！

第五話 殺生

「レナ！後ろ！」

「え？うわっ！」

「お姉も前！」

「あ！っ！」

ロビーに到着した私たちは、黒いB・O・W“一匹”を相手に奮闘していた。

「速すぎるよこいつ！」

「魅いちゃん！マシンガンじゃ当たらないと思う！ショットガンで当てるべきだよ！」

「レナさんの言う通りですよお姉！まずは当てて動きを止めないと！」

「わかった！」

私は懐からショットガンを取り出した。

「レナ！詩音！誘導して！」

「うん！魅いちゃん！」

「OKです！お姉！」

レナと詩音がうまく銃を扱い、私の目の前に誘導する。

「そこだ！」

ジャストミートはしなかったが血は辺りに飛び散った。ここぞとばかりに銃を乱射する。

だが、それだけ。後は白い壁に穴が開くだけ。と、いきなり照明が切れた。

「あ！」

「照明を割ったんだ！」

「まずいよ！この暗がりじゃ、あいつが有利だ！」

「懐中電灯をだすんだ！辺りを照らして！」

「わかった！」

三つの光がそこらを行き交う。黒い影を必死に探す。

「いた！」

レナが叫ぶ。

「早く！撃って！」

「うん！」

眩しさのためか、しばらく止まったそいつを撃った。血を出し、そいつは倒れた。

「弱点はわかったね。」

「うん。暗がりの中に、光を当てる。そしたら動きが止まるんだね。」

「意外ですね。」

「はい。」

「とりあえず、倒しかたはわかったけど、一瞬たりとも油断できないね。」

「ですね。」

「なあ、ウエスカー。」

「ん？」

「あのハンター　だっけか？あいつに弱点はないのか？」

「いや。」

「なんだ？」

「なぜ聞く？」

「それは…俺たちが会っちまったら、アレだからな。」

「ああ。なるほど。まあ、あいつらは、戦うばしょが明るいと暗い時によって体の動きが違うんだ。だから暗いところに光を当てると、体の動きを変えるのにかなりのタイムラグがあるんだ。」

「なるほど…」

「そんなに戦いたいか？」

「ごめんだな。…あいつらの勝てる相手か？魅音とか。」

「さあな。なぜそんなに気になる？」

「…」

あのあとから、あいつらの事を心配している自分がある。死なせたくないと願う自分がある。捨てたはずなのに。自分が居ては、また

危険になると、忘れたはずなのに。

実際、もうどうでもいいと思った。いざとなったら殺す覚悟もあった。さつき会うまでは。別れたあとから、あいつらが血まみれで横たわる映像が俺の頭に鮮明に流れている。無視できない。レナが、

魅音が、梨花ちゃんが、沙都子が、詩音が、血まみれになって…
そうやってはいけない。殺したくない。一緒に生きたい。笑いあいたい。そして、幸せな未来を掴みたい。

そんな考えが頭を駆け巡る。なぜかわからない。わかるはずもない。

「ついたぞ。…だが、」

エレベーターが屋上にたどり着いた。ドアを叩く音が聞こえる。

「いらぬ出迎えがあるようだ。」

「…」

俺は迷う頭を押さえつけ、銃を引き抜いた。

「はあ…はあ…」

「二体同時とか、きついでよ！」

「ライトを動かすんだ！狙いをつけるのはあとでいい！」

「見つけた！」

「撃て！」

三人の銃が一斉に火を吹く。
そいつはすぐに倒れ、私たちは次の相手を探す。その時、後ろのレナから悲鳴が聞こえた。

「きゃああああつ！」

「レナ！」

「レナさん！？」

「いい…から、早く…」

「…わかった。すぐに助けるからね！詩音！」

「見つけました！お姉！」

「OK！」

また私たちは引き金を引く。そいつもすぐに死んだ。

「さて…」

「圭一くんを追おう！」

「レナ…撃たれたんだよ？もう…」

「圭一くんが私たちは信じなくても、私たちは圭一くんを信じな
きゃ。ね？」

「…そうだね。あのお調子者が、好きなんだよね。」

「私だって、圭ちゃんがいないと、沙都子にも張り合いがなくなり
ますし、何より、我が部活の大黒柱ですしね。」

「あなたは部員じゃないでしょ。」

「ひどいですよお姉。私だけ蚊帳の外ですか？」

「くすくす…」

「レナ？」

「うっん…懐かしいなって、こっぴつ。今までずっと緊張してた
から。」

「そうですね…」

「じゃあ、圭ちゃんを“捕まえたら”、また、みんなで部活しよ！」

「うん！だね！」

「今度は私も交せてくださいよ。」

「そうと決まれば、まちゃんの元へ直行だよ！」

「うん！」

「はい！」

第五話 殺生（後書き）

とりあえず次回は早めにできるようがんばります。

第六話 謝罪（前書き）

今回でクライマックスへと転回します。思えばまだ9ヶ月か…

第六話 謝罪

「前原圭一とアルバード・ウエスカーは屋上に待機してあるはずの
ヘリで脱出するようだ。早く行け！」

そう通信を受けた私たちは、エレベーターで屋上へ向かう。今度こそ…

「圭ちゃん…」

チーンと音がなり扉の向こうから微かに破裂音が聞こえる。扉が開いた先には、圭ちゃんとウエスカーが群れるゾンビに向かって銃を撃っていた。

「ウエスカー！まずいぞ！これじゃ脱出できねえ！」

俺たちはゾンビの群れを相手に奮闘していた。

「まずいな……」

「圭ちゃん！助太刀するよ！」

「いらねえ！死んで……」

「圭……。こいつらに任せてへりで脱出するぞ。 困だ。」

「……なるほど。」

「乗り込め。」

「ああ！」

「待ってる。少しゾンビを片付ける。」

「わかった……」

俺はふとへりの内部を見渡す。何てことはない。普通の……

「！」

俺は素早くへりから飛び降り、走り出した。
直後、へりは爆発した。

「なんのつもりだ！ウエスカーア！」

爆発したへりを背に、俺は叫んだ。ゾンビは爆発で死んだらしい。

「失敗か…」

エレベーターに乗り込もうとしたウエスカーが立ち止まり、呟く。

「お前は本当に邪魔だ。」

そして、エレベーターへ乗り込む。

「ウエスカー！」

俺はエレベーターへ駆ける。が、

「ぐっつ！」

気が付かなかったが、爆発の時、右腕を負傷したようで、その場に崩れ落ちる。見ると、右腕が紅く染まっていた。

「圭一くん！」

レナが素早く俺に駆け寄り、俺の右腕に応急処置をする。

「ごめんね。圭一くん。」

「は？」

俺は何故か謝るレナの顔を覗いた。

「なんでお前が謝るんだよ。」

「ごめんね。圭ちゃん。」

「おいおい。魅音まで何を…」

俺は軽く笑い、思った。こうやって笑いあったのは、えらく久しぶりで、そして、えらく悲しい。なぜか、涙があふれそうだった。

「私たちが、あの時、あの電車で、なんで銃を抜けなかったのかって…本当にごめんね。」

「…なんで謝るんだよ。」

あの時の自分の愚かさは痛感していた。こっちこそ謝るべきなのに、なんでお前らが…

「また笑うためには、あそこで銃を抜くべきだったんだね。ごめんね。」

「謝るなよ…」

「ごめんね。圭くん…」

「謝るなって言ってるんだ！…俺が、捨てたのは間違っていたんだから。」

「圭ちゃん…」

「俺は最低だ…誰も信じず、自分だけを信じた。だから、俺は捨てた。罵るかと思ったのに、さげすまれると思ったのに…謝れると、

調子…狂うじゃねえかよ。」

俺は途中で涙が溢れていたのに気が付かなかった。それは悲しみではないのかもしれない。でも、それがなんなのか、わからなかった。ただ、何か重荷が軽くなったような気がした。

「指名手配者の入江陸佐！身柄を拘束する！」

「わわっ。ちょっと聞いてください。」

「彼を放しなさい。」

「と…富竹二尉!？」

「死んだはずでは…」

「今はそんなことはどうでもいい。アルバード・ウエスカーと鷹野三四はここにいるという情報は確かかい？」

「はい。監視カメラの映像ではつきりしております。」

「わかった。行くぞ。アルバード・ウエスカーと鷹野三四の身柄を確保する。」

「…おや。ずいぶんと久しぶりだな。鷹野三四。」

「う…う…」

「話せないか…まあ、監視カメラでみる限り、どういづものかはわかるけどな。どちらも、人の道から外れたものどうし…仲良くしようぜ。」

『梨花。行くのです。決着の時は近付いているのです。』

「…わかったわ。」

『梨花。でも…』

「答えならもう出ているわよ。心配しないで。」

『あじ』

「梨花。何を一人で呟いているんですの?」

「沙都子。出るのです。」

「?」

「圭」と、会えますですよ。」

第六話 謝罪（後書き）

次回は原作の再現みたくなるかもしれない

アクセス五万をたっせいしました！ほんっとついに、ありがとうございます！
います！

第七話 贖罪（前書き）

すみません！今回も遅れてしまいました！

第七話 贖罪

「ウエスカー！待て！」

レナに治療してもらい、俺はウエスカーを追っていたのはセキュリティームだ。

「ちっ…長居しすぎたか。」

「後ろにいるのは？」

レナが問う。

「フツ…」

「鷹野…」

「鷹野さん…？」

「今はそれはいい。ウエスカー、なぜ俺を裏切った。」

「…俺の計画の邪魔だからだ。」

「…計画？」

「ウエスカー。」

魅音が一步前に出た。その手にはひとつのファイルがある。裏返し

になっでいて、名前がわからない

「そのファイルは……」

「ウエスカー。これに見覚えあるよね。」

魅音がファイルを裏返す。俺は驚愕した。表には「前原圭一実験ファイル」と書かれていた。

「……」

「今、中身はわからない。でも、このファイル…内容が容易く想像できる。」

「ウエスカー。これ、血清を作るときのだよね？」

「いいや。」

「なに!」

俺は信じられなかった。血清を作る時と同時に、また違うのを……?

「あの二十一本目の注射器は…それか…っ!」

「いや……」

「は?」

「血清なんてものはない。あるのは新しいウィルスだけだ。」

「な……」

「血清なんてものがそんな簡単にできるわけないだろう。」

「じゃあ……あれは……あの実験は……」

「わかるだろう?」

「俺を騙すための……デモンストレーションか……」

「そつだ。容易く信じてくれて、楽なことこの上なかった。」

「ウエスカーアア!」

俺は銃を抜き、引き金を引く。

「……」

ウエスカーは避ける。何事もないかのように。

「な……!」

そこにいる皆は驚いた。俺とウエスカーとの距離はたったの二メートルだ。

「どうした……?」

「くっ……」

俺はまた撃つ。気が付くと、弾がなくなっていた。だが、壁に穴が

空くだけだった。

「なぜだ…?」

すると、ウエスカーが消えた。気が付くと、俺たちの後ろにいた。皆、驚愕で声が出なかった。俺も。

「圭一。お前のおかげで、人類滅亡に一步近づいた。感謝するぞ。」
ウエスカーはそう言って、ゆっくりと、歩き初めた。皆、腰を抜かし、追うことは出来なかった。

そのあと、俺たちは立ち去ろうとした鷹野を拘束し、ひとまず下に降りていった。

「みなさん！無事ですか！」

「監督！」

一階には、監督がいた。少しやつれていた。

「今まで何処に？」

「神奈川にいました。ウエスカーの目を欺くために…」

「なぜ？」

「圭一くん。ウエスカーは、実は新しいウイルスを開発したんだ。」

「知ってます。」

「なんですって！？…ということは、事態はかなり切羽詰まっています。」

「どういうことですか？」

「ウエスカーがそのウイルスの存在を教えるということは、私たちがみな殺すということに繋がります。」

「なに！？」

「ですが、そう簡単にはいかないでしょう？皆殺しなんて、一人では無理です。」

「いえ…出来るんです。あのウイルスを使えば…」

「え？」

「すみません。圭一くん。あのウイルスを作ったのは…私なんです。」

「

「監督が？」

「はい…詳しい事情はあとです。ウィルスの効果を説明します。あのウィルスは…」

「圭一くんたちだね!？」

唐突に誰かが割り込んできた。俺はその人物との再会に、驚きを隠せなかった。

「富竹さん!？」

「なんで…タイラントなっただはずじゃ…」

「タイラントになる実験の前に入江所長に実験台をすり替えてもらったんだ。」

「彼がいないと、鷹野さんの野望は止められませんから。」

「あ…魅音!鷹野さんを…」

「え…鷹野さん？」

「富竹さん。鷹野さんを捕縛しました。連れ帰ってください。」

「鷹野さん…」

「あ…ああ…」

「鷹野さんは、雛見沢ウィルスの影響で、知能が著しく低下して
います。」

「雛見沢ウィルス？」

「自分で作ったようです。」

その時、新たな客が来た。俺は今度は、再会を喜ぶように名前をよ
んだ。

「梨花ちゃん！沙都子！」

「圭一！」

「圭一さん！」

「なんできたの？車から出るなって言ったはずですよ。」

「圭一がいる予感がしたのです。」

「そうか…信じてくれたんだな。俺がいるって。」

「ところで圭一くん。」

富竹さんが険しい顔つきで話し出した。

「雛見沢ウィルスとは？」

「正確にはわかりませんが、おそらく、肉体の超回復でしょう。」

「そこまで…」

富竹さんは、鷹野さんの肩を掴み、叫んだ。

「鷹野さん！あなたの目的は、おじいさんの研究を認めてもらうためでしょう？！この方法は間違っているんだ！」

「あ…ああ…」

鷹野の目から涙が落ちる。脳は理解しているのか…？

「もう一度、僕とやり直そう。そして、田無美代子をとりにどすんだ。ね？」

「お…じい…ちゃん…」

そうやって鷹野は眠った。とても安らかだった。なにを見ているのだろう。思えば、今までの事件の発端は、鷹野三四だった。だが、鷹野三四を真に恨んではない。鷹野三四も、また、なにかを守るうとしたのだろう。根拠はない。だが、そう思えた。

「…わて。」

「圭一くん？」

俺は安らかな空気につつまれた場所に背を向け、エレベーターに向かい、歩きだした。

「たしか、あいつがいるのは屋上だったな…」

さっきセキュリティルームで調べ、ヘリを待っているようだ。新型
ウィルス有能力など、すぐわかる。

「…最後だ。決着をつけるぞ。ウェスカー。」

第七話 贖罪（後書き）

鷹野の下りがどうも納得いかず…結局これにまとまりました。

第八話 決着（前書き）

物語はクライマックス！あと少しです！

第八話 決着

「なぜだ…時間はとっくに過ぎているぞ。なぜ来ない。」

「最初から来る気はないぜ。へりは。」

「圭…?」

「富竹さんの部下だからな、それを頼まれたのは。」

「僕の目が黒いうちは、許さないよ。ウエスカー。」

「富竹…!」

ウエスカーは明らかに動揺していた。ウエスカーが動揺しているのは初めて見た。

「くっ…」

ウエスカーは俺たちに近付いてきた。

「おっと。僕たちを倒しても、ビルの周りには、番犬部隊が待機しているよ。ウイルスで身体能力が上がった君でも、360°からの銃撃には耐えられないだろう?」

「…っ…どけ…富竹…圭…どけえええ!!」

「!」

ウエスカーはいきなり走り、消えた。気が付くと、俺の首で感じた苦痛と共に、俺は宙に浮いていた。

「がっ…ぐっ…」

ウエスカーは俺の首を締め付けていた。

「圭一…！」

「圭一くん！」

とっさに富竹さんが銃を抜き、ウエスカーの頭に撃つ。だがウエスカーは、かなりの至近距離で弾をかわした。頭だけを動かしたのだ。

「な…！」

「富竹さん…体を…手を…撃って…」

富竹さんは、ウエスカーの体を撃ったあと、たじろぐウエスカーの、手を撃った。

「ぐっ…」

「かはっ！…はあ…はあ…」

「…いつらっ…」

「ウエスカー…お前の負けだ。諦めろ。」

「まだなにか？」

「リミッターを外せるんです。」

「リミッター？」

「言ってしまえば、スーパータイラントになるためのリミッターを、自分で外せるんです。」

「その力は…？」

「スーパータイラントの5倍。T・ウィルス適合者の2・5倍です。」

「

「それじゃあ、圭ちゃんに勝ち目は…」

「…ほぼないでしょう。」

「そんな…」

「お姉。圭ちゃんを助けにいきましょう。無駄かもしれないですけど。」

「そうだね。行かなきゃ。」

「圭くんを見捨てるなんて…」

「もつできませんわね。」

「圭一には、ボクたちが必要なのです。」

「よし！行くよ、みんな！」

「くそ！当たらねえ！」

「速いな…教官の僕でも、あたらない…」

「単発じゃ駄目だ。」

俺は残り五個の手榴弾の一つのピンを抜き、ウエスカーが来るであろう位置に投げる。

「当たるはずだ…」

手榴弾は爆発した。だが、そこにはウエスカーはいなかった。そして声は後ろで、した。

「予想していたが、計算していたとは思わなかったぜ。」

「！」

俺は慌てて振り向く。そこには、服は破れているものの、無傷で立っているウエスカーがいた。

「くっ…富竹さん！下がって！」

「な、何をする気だい？」

「いいから！」

富竹さんは言われた通りに下がり、俺は二個の手榴弾のピンを抜き、左右に投げた。これで爆風に挟まれる形になる。

「一本の矢で折れるから二本か…それでも折れるだろう？だから、三本…といきたいが、俺はそれでも折れない。」

また声が後ろで、した。

「甘いな。圭一。」

「ウエスカー…っ！」

「圭ちゃん！」

「助けに来たよ！」

「さあ、一緒にウエスカーを倒しましょう！」

「無理だ…」

「え？」

「こいつには…東でかかっても無理だ…」

「え？でも…」

「うるせえ！奇跡でもない限り、無理だ！」

「圭ちゃん…私たちは、また圭ちゃんを見捨てたら、またあの時に
逆戻りだと思うんです。それに…」

「奇跡は信じあえば、必ず起きるんだよ！」

「そうなのです。オヤシロ様もそう言っているのです。」

「お前ら…」

「ていうか、勝手に助太刀するよ。」

「わかった。」

高揚している心を鎮め、俺はコンクリートの地を踏む。思い切り。

「ウエスカー！」

「銃が敵わないから肉弾戦か…単純だな。」

「うるせえ！…」

俺は思い切り振りかぶっていた右の拳をウエスカーの顔に向け、放つ。

ウエスカーは避けることもなく、右手で俺の拳を止める。

「無駄だ。」

「…」

俺はもう一つの手でウエスカーの腹に掌ていを繰り出し、ウエスカーを軽く浮かせる。

「ぬ…」

「魅音！浮かす！」

「え？あ、ああ、うん！」

俺は思い切り踏み込み、手に力を込め、ウエスカーを二メートルほど上に浮かした。

「みんな！撃って！」

「うん！」

「くっ…」

ウエスカーはかるうじて身をひねり、銃弾を避けようとした。が、二、三発の弾がかすった。

「…ほう。」

「くっ…」

「ウエスカー。お前に少し当たるとは。」

「偶然だ…！」

「もう一度だ。」

「俺は避けることに専念する。もうあたらんぞ！」

「ああ。だろうな。よしんば当たったとしても、ダメージは皆無。
クリーンヒットしないからな。」

俺は一旦下がり、ウエスカーに聞こえないように、皆に告げる。

「みんな。俺の見ている方向にウエスカーを誘導してくれ。」

「え？」

「圭ちゃん？」

悟られてはいけない。なぜなら、みんな、止めるだろうから。

「これで終わりだ…死ねえ！」

ウエスカーが消える。ポケットに手を忍ばせ、俺は叫ぶ。

「魅音！2時の方向！レナは3時の方向！富竹さん！10時の方向

！詩音！11時の方向！」

銃弾が飛び交うのを確認し、俺は一直線に駆け抜ける。勿論、ウエスカーはいない。だが、

「あと少し……」

俺は更に加速する。そして、来た。

「！」

「かかったな！ウエスカー！」

「なっ……誘導だと……?!」

俺はウエスカーにタツクルし、その勢いで屋上を飛び出す。

「圭ちゃん!？」

「失敗したの!？」

「いや…大成功だ。じゃあな、みんな。俺はこれでリタイヤだ。」

俺は予め持っていた、残り二つ手榴弾をとりだし、仰向けに落ちるウエスカーの口にねじ込む。

「最後の晚餐だ！しっかり食えよ！ウエスカー！」

俺は一気に二つのピンを抜く。

「こつしなきゃ勝てねえってか…」

残り3秒。

「確かにすごいぜ、新ウィルス。」

残り2秒。

「自分の命とみんなの気持ちを犠牲にしてんだ。」

残り1秒。

「失敗できねえよ。なあウエスカー！」

そして、爆発した。

第八話 決着（後書き）

最後の話までお付き合いください。

最終話 欠片（前書き）

最終話！長かったですね？。

この話も最終話だけあって長いですが（笑）

最終話 欠片

横にしていた体をお越し、俺は窓越しに空を見上げる。今は、6月から7月の変わり目だ。アブラゼミやミンミンゼミがうるさい。だがそれさえも、今の俺には、とても気持ちのいいものだった。

「蝉か…懐かしいな。雛見沢では、蝸ひぐらしを聞いたもんだが…」

俺はベッドから降り、献血器をガラガラと引きながら部屋をでる。トイレでも行くか。

部屋から出て数歩歩いた時、背後から大声が響いた。

「あーっ！圭ちゃん！1ヶ月は安静でしょ！また起き上がって！」

「魅いちゃん。ここは病院だから、静かに…」

「でも、入院して一週間でこれなんて、化け物に等しいですわ。」

「たしかあの時、体はボロボロだったはずなのです。T-ウィルスは恐ろしいのです。」

「だからとりあえず病室に戻って！」

「わーかったよ。」

俺はしぶしぶ病室に戻る。この会話、これで五回目だぞ…

「全く、驚いたったらありゃしない。死んだと思ったら生きてるし、

目を覚まさないと思ったら三日後には平然とトイレ行ってるし…」

「みい。そんなこと言いつつも、魅音は圭一が生きてたと知ったときも、目を覚ましたときも、嬉しくて一晩中泣き明かしてたのです。」

「り、梨花ちゃん！なに言ってるのかな、かな？！あ、あは、あはははは！」

「魅いちゃん。レナの口調真似ないで欲しいかな、かな。」

「そっか…ごめんな。心配かけて。」

「うん…」

「でもさ、どうやってあの爆発で生き残ったの？」

「ああ。たいした事じゃないんだ。でも不思議だよ、自分でも。」

「なんで？」

「ああ、その為には、生き残る経緯を説明しなきゃ。…あの時、なんか声が聞こえたんだ。」

「失敗できねえよなあ！ウエスカー！」

『前原圭一……』

「！」

気が付くと、周りは止まっていた。動けるのは、おれだけだったんだ。目の前には紫の髪に角を生やした、幼い女の子がいた。

『あなたは、またそうして命をかける。思い出しなさい。あなたが起こしてきた惨劇を……そして行き着いた結末を……』

「なにを言ってる……？」

『あなたは覚えていないでしょう……ですが、どこかのあなたは思い出した。』

「だからなにを言ってるんだ？惨劇……？」

『惨劇を繰り返すな、前原圭一。お前は生きなければならぬ。人の子が産み出した、人ならざるもの。それを救え。共存しろとは言わない。ただ、安らかに、幸せに逝かせる。』

「なんだ……？俺は何を見ている？」

『跳べ。前原圭一。』

俺の体は、ウエスカーから離れていた。

「…なにそれ。」

「俺だつてなにかわかんねえよ。でもそのあと、ガラスを割ってビルの中に飛び込んだから、結果的に助けられたんだけどな。」

「圭一くんが言うならそうかも知れないけど…」

「ボクにはわかるのです。それはオヤシロさまなのです。」

「オヤシロさま…」

「難見沢の神様…」

「オヤシロさまは、ボクたちのこと、今でも見守っていてくれるのです。」

「梨花ちゃん…」

「そだ！久しぶりに部活しよ！トランプ持って来たんだ！」

「じゃあ、ジジぬきだな。」

「…懐かしいね。ジジぬき。」

「このメンバーで初めてやった部活ですわね。」

「あの時から圭一はダークホースになったのです。」

「じゃあ始めようか。」

魅音がカードをシャッフルし始める。

「魅音。待つて欲しいのです。もう一人、入れて欲しいのです。」

「えー。部活は余り新入生は認めないけど…ま、梨花ちゃんの頼みだし、いいよ。誰だい？」

「ボクの親戚なのです。」

その時、ある小さな女の子がひょこつと出てきた。紫の髪に角を生やした、梨花ちゃんぐらいの女の子。

「あ…」

まさしく、あの時見たオヤシロさまの姿だった。

「羽入と申します。よろしくお願いするのです。」

「入江先生。鷹野さんの状態は…」

「非常に不安定です。今は雛見沢ウイルスにより、ダメージの超回復で、肉体は問題ありません。ですが、あまり持ちません。」

「なぜですか？」

「T-ウイルスと似ています。T-ウイルスは激しい新陳代謝で肉体が腐りますが、これはウイルスが、エネルギーを生成する機能を有しており、エネルギーを細胞に常に補給しています。それにより、肉体を腐らせず、激しい新陳代謝も耐える事ができます。ですが、細胞はいずれエネルギーを生成する必要がなくなり、生成しなくなると、ウイルスは肉体を完全に支配します。すると、脳の命令を肉体が聞かなくなり、意識があるゾンビとなります。」

「そんな恐ろしい物を…」

「こんなウイルスは見たことがありません…ですが、なんとかして見せます。必ず…」

「監督！」

「すみません。遅れました。」

「早く…早く悟史くんの方に…」

「ええ…」

私と詩音さんはエレベーターに乗り込み、最深部へ向かう。「治療室」と書いてある扉の横は、ガラスが張っており、中が見えるようになっていてる。

その室内を見て、詩音さんは涙を流した。

「悟史くん…やっと…」

「詩音さん。悟史くんは今、Ｔ－ウィルスと戦っています。」

「え？」

「Ｔ－ウィルス抗体を注入し、ゾンビ化は防いでますが、このまま起こせばふとした事でゾンビ化しかねない。」

「なぜですか？」

「実は抗体を倒す事で、ウィルスは強くなっているんです。ですから、新しい抗体を作らなければ……」

「そんな……」

「大丈夫です。悟史くんは、わたしがなんとかして見せます！」

「監督……」

「必ず……」

「今日は楽しかったのです。」

私たちは圭一のお見舞いの後に、その後の住まいに戻った。ここには以前のようには私と沙都子が住んでいる。レナと詩音と魅音は隣の部屋だ。

「羽入。なんで圭一の前に姿を表したの？」

「あつ？」

「とぼけないで。落ちる圭一を助けたでしょ？」

「…梨花。この世界は、実はカケラの世界から外れた世界なのです。」

羽入はいきなり真面目な顔をして話し始めた。

「カケラの世界から外れた？」

「ええ。だから、今までのカケラとは違い、小此木が死に、ウエスカーと言う存在が運命を狂わせた。梨花、実はもう違う世界で惨劇は回避されているのですよ。」

「なんですか？！」

「しーっ。沙都子が起きちゃうのです。」

「あ……」

「しかも、惨劇を回避した中心に居たのは、圭一なのです…」

「あの…?」

「このカケラを回収するには、二つの条件を満たす必要がありました。」

「…なに?」

「一つは、惨劇を回避する事。これは部活メンバーが生き残り、元凶を探ること。なので、圭一が死んでは行けなかったのです。」

「…なるほど。で、二つ目は?」

「今までのカケラにはいなかった敵を殺すこと。これはウエスカーです。」

「なるほど…でも、私の記憶がないのはなぜ?」

「さっき言った惨劇を回避したカケラには、梨花がこのカケラに来たと同時に行きました。しかし、このカケラでは惨劇を回避するのに時間がかかり過ぎました。だから、記憶は引き継がれてないのです。」

「そう…」

「でも、惨劇は回避できたのです! 万々歳なのです!」

「あまりはしゃがないの。沙都子起きるわよ。」

「あう…」

惨劇を回避できた。今はただそれだけの事実で、胸がいつぱいになつて、今すぐにでも裸足で外を駆け回りたいような高揚が私を熱くする。

カナカナカナカナ…

「ひぐさ蝸が鳴いてるわね。」

「懐かしいですね。梨花。」

私はゆっくりと目を閉じた。夜の夏の風に身を委ね、風の音とひぐさ蝸の声を感じた。

最終話 欠片（後書き）

ま、最終話と言っても次にエピソードがあるんですけどね。（最後
までこんな感じですよ）

エピソード（前書き）

最終話！長かったですね。

約9ヶ月、自分の文章力がないのを感じ、不安でしたが、ぶじやり
終えたって感じます。

詳しいことはあとがきで。

エピソード

カナカナカナカナ…

蝸ひくわしが鳴いている。それが窓越しに聞こえ、何か悲しさを思い出す。

「蝸ひくわしは、確か9月まで鳴くんだよね。鷹野さん。」

僕は聞こえる筈のない彼女に話しかける。当然、返事はなかった。だが僕は喋り続けた。

「あれから2ヶ月。毎日来てるけど、君はまだ目を覚まさない。…
雛見沢ウィルスか。君の、その素晴らしい頭脳は、お祖父さん譲り
なのかな？」

彼女は黙ったままだ。だが関係ない。返事を待つてはいるが、話す
事に意味がある。そばにいることに意味がある。

「あの子たちは元気に暮らしてるよ、鷹野さん。」

そういった時、彼女の口が微かに動いた気がした。いや、動いた。

「鷹野さん?!」

僕は彼女を見下ろす。口はまだ動いていた。

「富竹さん！鷹野さんの意識が戻りました!」

「…はい。」

彼女はこう言っていた。

(ごめんなさい)

「えー、今回また新しく転校生がやってきました。」

先生が教壇に立つ。

「またか。早いな。」

「またって言ってもおじさんたちもそうだからねえ。」

「こんな中途半端な時期に転校か…どんな奴だ？」

「だから人の事言えないって。」

「はい、静かに。」

先生がざわつくみんなを、手を叩いて静める。

「入って来なさい。」

「はい。」

出てきたのは、金髪に端正な顔立ちの、気弱そうな男だった。

「誰だ？」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

レナ、魅音、詩音が、開いた口がふさがっていなかった。特に詩音は、何故か泣きそうになっていた。

転校生が黒板に名前を書く。「北条悟史」

「えっと、北条悟史と言います。どうぞよろしくお願いします。」

「悟史くん!」

詩音が興奮のあまり、立ち上がり、悟史の元へ駆け、抱きついた。

「悟史!」

「悟史くん!」

魅音とレナも立ち上がる。

悟史に抱き着いて泣きじゃくる詩音に、悟史は言った。

「ただいま。詩音。」

誰だって幸せになる権利はある。難しいのはその享受。

誰だって幸せになる権利はある。難しいのはその履行。

私だって幸せになる権利はある。難しいのはその妥協。

「ありがとう…前原圭一。」

- 完 -

エピローグ（後書き）

終わったあ！

いやあ、今までいろんなことがありました。感想で荒らしが出たり、慰められたり、参考にされたり、更新を投げ出そうとしたり…

でも、その全てがあつて、この物語を完結できたということなんです。最初は不安がプンプンでしたが、今は達成感です！

今まで9ヶ月、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9984r/>

ひぐらしバイオハザード

2011年11月20日18時58分発行